

蜜のあわれ（室生犀星）

一、あたいは殺されない

「おじさま、お早うございます。」

「あ、お早う、好いご機嫌らしいね。」

「こんなよいお天気なのに、誰だって機嫌よくしていきや悪いわ、おじさまも、さばさばしたお顔でいらっしやる。」

「こんなに朝早くやって来て、またおねだりかね。どうも、あやしいな。」

「ううん、いや、ちがう。」

「じゃ何だ。言つてご覧。」

「あのね、このあいだね。あの、」

「うん。」

「このあいだね、小説の雑誌巻頭にあたいの絵をおかきになったでしょう。」

「あ、画いたよ、一疋^{びき}いる金魚の絵をかいた。それがどうしたの。」

「あれね、とてもお上手だったわ、眼なんかぴちぴちしてて、とてもね。本物にそっくりだったわ。」

「頼まれて生れてはじめて絵というものを画いて見たんだよ。本当は絵だか何だか判らないがね。」

「あたいにも、そのうち一枚画いていただきたいわ。」

「絵は画こうとしたって却々^{なかなか}、画けるものではないよ。君から見ると似ているかどうかね。」

「よく似ていたわ、それでね、あれから後に、一週間程してから、雑誌社からお礼のお金が書留で着いたでしょう。」

「これも生れてはじめて画料というものを貰^{もら}ったのだが、それがどうかしたかね。」

「どれだけいただきになったの。」

「文章が一枚半ついていてね、合わせて一万円貰った。」

「おじさまはそれをわたくしにね、正直に仰^{おつしや}有らなかつたわね。幾ら来たつてこともね。」

「金魚にお金の話をしたつて、どうにもならないじゃないの。」

「だって、あれ、ほんとうは、あたいのお金じゃないこと、あたいをお画きになったんだもん、あたいにくださるとばかり、そうおもっていたわ。」

「何だか僕もそんな気がしないでも、なかつたんだけど、」

「でね、おじさま、それについてね。」

「あ、」

「もうお金、だいぶ、おつかいになった？」

「半分つかったけれど、まだある。」

「何に半分、おつかいになったの。」

「千五百円の玉露を百目買ったし、雉^き子羽根のはたきを一本と、赤玉チーズを一個買った、……」

「あたいには、とうとう、何も買ってくださいさなかつたわね。」

「君なんかのことは、まるで、わすれていた。」

「おじさまはずるいわね。あれ、本当をいえばあたいのお金じゃないの。」

「そういうことになるかね。きみを見て画いただけで、それがきみのお金になるものかな。」

「あたい、いつ下さるか、窓の方を毎日のぞいていたのよ、で、ね、あと半分のお金、いただきたいわ。」

「一たいきみは何を買うつもりなの、」

「お友達の金魚をたくさん買ってほしいのよ。」

「あ、そうか、遊び友達がいるんだね、それは気がつかなかった。」

「それから金魚餌という箱入の餌がほしいわ、かがみのついで、美しい箱なのよ。」

「かがみっていうのは錫すずの紙の事だろう、あれはかがみになりますかね。」

「水にぬれるとぴかぴかして、かがみみたいになるわよ、それからね、めだかをたくさん買うの。」

「そんなめだかどうするんだ。」

「めだかの尾がともおいしいんですもの。毎日少しずつかじってやるの。」

「尾をかじっては、めだかが可哀そうじゃないか。」

「齧かつてもかじっても、目高の尾というものは、すぐ、生えてくるものよ、だから、可哀そうなことないわ。」

「めだかの尾はたとえば、どんなあじがする。」

「ぬめっとして口の中でも生きていて、ひりひりうごいてるわ、とても、おいしいのよ。」

「さんこくだね。」

「おじさま、早くお金出してよ、あたいのお金なのに、出しじぶらないでよ。早くさ。」

「じゃ、千円札で五枚、それにあま剩ったこまかいのが、百円札と銀貨を合わせて総計五千九百円になる。」

「ええ、これで決算済みよ、それからついでに、外にもっと細かいのもいただきたいわ。」

「銅貨で重くていいか、」

「かまいません、それからおじさま、あたい、歯のお医者様に行きたいんですから、別にその方のお金も頂戴。」

「金魚が歯医者にかかるなんて聞いたこともないが、歯がどう痛いのか。」

「このあいだね、慌てて、石を嚙かんじやった、がりがりつて。」

「あわてるからだよ、たべものは一遍そつと口にさわって見てから、食べるようにするんだね、歯はいたむの。」

「痛いわ、骨にひびくわ。」

「骨にひびくつて、骨につて背骨の骨のことか。」

「お背中の骨なのよ、おじさま、いま骨の話をしてからおじさまの顔色が、へんに変つて来たわね、それ、どうしたのよ。」

「僕はまだ金魚の骨というものを見たことがないんだ、金魚に背骨があるかないかも昔からわすれていた。人間で金魚の骨を見た人が何人いるかしら、全くたいへんなことを忘れていたものだ。」

「どうしてそんな、あたい達の骨が見たいの。」

「見たいような見たくないような、また、怖いような気もするんだ。よく考えたら人間は誰でも、いろいろな骨は見て来たけれど、まだ金魚の骨だけは見た人間は滅多にいない、たとえばきみの優しいからだに骨があるとは、どうにも考えられないことだ。」

「ぐにやぐにやだと仰有るの。」

「あんな針みたいな骨があるなんて、きみの顔を見ていたっ

て、想像もつかないことだからね。」

「死んだら、かいぼうすれば、いいじゃないの。」

「人間は金魚の骨だけは見たくないって、皆さんがそう言っているんだよ。可哀そうだから。」

「あたいもまだ見たことないわ、じゃ、あたい、そろそろお友達を買いにいつてくるわよ、黒いのや斑^{あじ}なのや、それから、めだかも。」

「行つて来たまえ、自動車に気をつけてね。」

「ええ、お金持になれて、とても今日は嬉しいわ。」

「ハンド・バッグを掏^掏られないように気をつけておいで。」

「はい、行つてまいります。あ、いいお天気だなあ。」

「水道の水は飲むなよ、げえになるからなあ。」

「はい、すぐかえるから、おじさま、温和^{おとな}しくして待っていてらっしゃい。」

「よしよし、……」

「おじさまの好きな、いしごろも、買つて来てあげるわ。」

「それから金平糖^{こんぺいとう}もね、ちいちゃいのは頬^ほばるのに面倒だから、鬼みたいな大粒のやつがいいよ。」

「赤いのや青いのが雑^{まじ}っている、あれでいいんでしょう。どのくらいいいります。」

「そうね、三百円くらいいるな、子供に頒^わけてやることもあるからね。」

「そのお金、先刻いただいた分とは、べつにいただかなきゃ。」

「そうか、ほら、これでいいね。なかなか抜^ぬからないね、きみは。」

「だってあたい、いろいろ考えてつかうから、おじさまの金

米糖のお金は出せないわ。石ごろものは、あたいのおみやげにするけど。」

「有難う、たすかった。」

「ふふ、では行つてまいります。」

「道くさをしないで、ちゃんと、お八ツまでにかえて来るんだよ。」

「はい、」

「うなぎや鯖^{さば}を店さきで見ていると、さかなやさんに捕まつて、売られてしまふぜ。」

「はい、はい。」

「ただいま、——あ、怖^{こわ}かった、も、ちよつとで誘拐^{きうがい}されるところだった。」

「どうした、真青な顔をしているじゃないか。ふるえてさ、きみらしくもないね。」

「おじさま、お水を一杯ちようだい、こんな怖い事はじめてよ、呼吸^{こそ}もつけないわ。」

「ほら、水だ、ぐっと飲んで気を落ちつけて、何が怖^{こわ}かったかという話を話すんだよ。」

「あ、美味^{おい}しい、もう少し頂戴。先刻のクロロフィルの入った水よりか、よっぽど、美味しい。」

「何だクロロフィルなんて。」

「あたいね、おじさま、途中で思い出して丸ビルまで急に行つてみたのよ、お天気は上々だしね。」

「丸ビルまでか、驚^{おどろ}いたやつだな、そんな派手な恰好^{かっこう}をして。」

「此間^{こゝ}からあたい、歯^はが痛い痛いって言っていたでしょう、

だから雨がふるとこまると思つて、七階のバトラー歯科医院まで思い切つて行つちやつた。」

「彼処はきみたちの行く歯科ではないよ、きみたちは蟹科に行けばたくさんなんだ、」

「失礼なおじさまね、蟹科は抜歯ばかりで、歯の技術はてんでだめなのよ、おじさまは何時も歯が悪いくせに、何もござんじないんだ。」

「道理で永いお使いだと思つていたんだ。だってバトラーさんは時間ぎめだから、ふいに行つても療治してもらえない筈じゃないか、幾日の何時という時間を貰わなければならないんだが、」

「そこがあたいの腕のあるところなのよ、ちゃんと療治していただいて、疼きもとうに治つちやつた。」

「どうしてそんなウマイことをしたんだ。」

「黒の眼鏡をかけた、英語のぺらぺらのおばちゃんがいらっしゃるでしょう。」

「あ、いるいる、きょうもいたかい。」

「だからあたい、おばちゃんに歯がいたくて死にそうだと、たのんじやつたの、半分泣顔して見せてやつたの。」

「そしたら、」

「そしたらセンセイのところにあたいを連れて行つて、この子の歯の中に蟹の子がいるそうですから、つまみ出してくださいと頼んでくださいました。センセイはピンセットの先に、とうとう十二足の蟹の卵を捜して、つまみ出して下すつたわよ。」

「十二足とはたいへん居たものだな。」

「そして一応抜歯してから、歯は入歯しなければならないですって。」

「金魚のくせに入歯するなんて変じゃないか。」

「あたいの歯は二千円くらいだけど、こんどのおじさまの歯は金と白金とをまぜてつくるんですって、でなきゃ、どんなに叩くにしても、おじさまの癩癩玉は、いつも入歯まで噛みくだいておしまいになりますと、センセイがおわらいになつて仰有つていらつしたわ。」

「かかるだろうなあ。」

「そつと聞いたら八万六千円もかかるそうだわ、だから、あたひ、ペソを搔いたような顔をして見せて、着いたばかりの原稿料の小切手を置いて来たわ、これ内金でございます、なんしろおじさまは貧乏ですからと申し上げたわ。」

「よけいなことは言わないものだ。」

「それからあたい、治療の椅子に腰かけていると、うがい器にどんな仕掛になつているのでしょいか、漂白硝子器に水がくるくる舞いをして、しじゅう清潔なお水が走つて流れていくんです、それを見ていると先刻からずっと、喉が乾いて尾も頭もからからになつていふことに気づいたの、我慢がならなくなつて、助手さんの隙を見てね、コップの水を飲んでしまった。飲んでから気がついて青くなつちやつた、あれみな水道の水なんですから、だから慌てて口をもががしたけれど、もう遅かつたわ、げえになりそうになつちやつたんです。」

「だから出しなにあんなに、水道の水は飲むなど、言つておいたじゃないか。」

「あたい、すぐ助手さんと呼んだわ、そしてこのコップの水

を飲んだんですけれど、これ、毒でしようかしらときくと、いいえ、召し上ってもかまいはしませんと仰有ったから、でも、金魚には水道の水は毒でしようと思きなおすと、そうね、金魚にもお毒ということは無いでしょう、どうして金魚の事なぞいまどき仰有るんですかと言われたので、あたい、すっかり赧はにかくなって家にたくさん金魚を飼っているものですから、ここにあげても、いまごろどうしているかと心配でなら無いんでございますという、助手さんは何てお優しいお嬢様でしょうというの、おじさま、あたいも外に出ると大したお嬢様になって見えるらしいわね、驚いちゃったでしょう。」

「ちつとも驚かないよ、きみが令嬢でなかったら、令嬢らしい者なんて世界に一人もいないよ。」

「おじさまもそう思ってくれるかな、嬉しいナ、ところで助手さんはこのお水にクロロフィルというお薬がはいっているから、金魚の鱗にも効く場合がありますと仰有ったので、あたい、もう少し頂いたわ、クロロフィルって青い藻みたいに、美しい色をしているお薬なんです。」

「僕の胃腸薬なんかに、クロロフィルが入っていて、散薬だけれど、まるで緑色の薬なんだ。」

「おじさま、こんどそのお薬少し頂かしてね。」

「何にするの。」

「お腹があまり大きくふくれているから、服ふくむとなおらないかと思うの。」

「その内頒うちわけてあげるよ、併し金魚に効くかどうか、金魚屋さんによく聞いてからにするといいよ。いまどきの薬の事だから、間違まちがうとたいへんな失敗になるからね。」

「それはよく聞いて頂かないとこまるわね。金魚屋さんで金魚のお医者様みたいだから、何でも聞くと知っていらっしやるわ。」

「うっかり薬なぞ服まない方がいいよ。」

「それから療治をして控え室に戻ると、大きな西洋人が二人待ち合わせていて、二人とも睡ねっていたわ、あたいみたいに赤い顔をしていらっしったものですから、あたいまで睡ねくなっちゃった。あたい、このごろね、赤い雑誌の表紙の色を見ただけでも、すぐ睡ね気がして来るのよ。」

「金魚というものは泳ぎながら、みんな何時でも睡ねっているんだ、口をとじたままでね。」

「それからタクシーに乗ったら、燐マツチ寸一つ貰もらいました。お釣錢を貰おうとしたら、手を握られちゃった。言い分が氣障きざじゃないの、お嬢さまのおてては何ておつめたいんですと来た、あたい怖こくなって、さよならと言って降りたわ。」

「さよならなんて言わなくともいいんだよ、手をにぎられたくせに。」

「それからがたいへんなことが始まったのよ。」

「どう、たいへんなことっていうのは。」

「新橋で省線に乗ったでしょう、乗るとすぐあたいの肩に手をかけて、何処に行つて来たんだと、青っぽい服を着た若い男の人がいうの、あたい、こんなにちんぴらでしょう、肩にらくに手を置けるんですもの、丸ビルの齒医者さんまで行つたんだと答えたら、どちらに帰るんだといったから、大森までという、僕も大森に行くんだから下車したら五分間つきあつてくれというの、あたい、きゆうに怖こくなっちゃって、

その人のそばを離れて後ろ側の吊り皮にかわっちゃったの、そのとき、つい失礼しますと言っちゃった。」

「ばかだなあ、そんな時に失礼しますなんて言う奴があるかね。それからどうしたの。」

「そしたら次の駅につくと、すぐあたいのそばにまた寄って来て、たくさん乗客のいる中でも平気でいうんです。齒医者にかかっているなら度たび通わなければならぬから、この次はいつ行くんだ、その日をいつてくれれば、丸ビルで待ち合わせようじゃないかというんです。あたい、もうその人がとても急に怖くなってしまった。こんな人のことをぐれんたいというんだなと思い、がたがたハンド・バッグを提げている手がふるえて来たわ。」

「一さい口を利かなかった方がよかったのだ、きみは一々返事をしたことがおぼこに見えたんだよ、何処までもきみはこどもくさいからね。」

「それでね、大森に降りたら、白木屋の入口で待っていると、あたい、もう黙って返事をしなかったわ。そしたら、待つか待たないか返事をしろと迫るの、あたい、もう誰かにたすけて貰おうかと思ったけど、例の肩の手がはなれないんですもの、だから、こんどは出口の方に行ってみると、すぐついて来たわ、そのついて来方があんまり早いもんだから、乗客は誰もふしぎそうに見る者は一人もいないんです。硝子戸に顔をくっつけていると、硝子が曇っちゃって、あたいの心と同じ色になっちゃった。」

「それから男はどうしたい。」

「大森に着く前にもう一ぺん念を押していったわ、白木屋の

前に来なかったら、ただじゃ置かないと、省線に張り込んでいるからそう思えと言ったわ、あたい、下車するとバスの停留場まで趨ったわ、うしろ向くと捕まえられると思ってがたがた趨った。」

「人もあろうに僕の家の者にも、そんな男の手が伸びるなんて、あきれたもんだ。まだ怖いかね。」

「おじさまにお話したら、ブルブルが取れちゃった、あたい、そんなにうきうきして見えるかしら、それが気になるのよ。」

「きみの少女くさいところを狙ったのだろうが、この狙いは、ねらい損なんだね、きみなんかのように少女くさいのは却々手にのりそうで、いざとなると、ぴょんと跳ね上ってしまつて草臥れもうけさ。」

「あたい、もう丸ビルなんかに行かないわ、もうこりごりよ、けど、おじさまの顔みていると、だんだん怖いのが剥がれて行くわ。よつぽど、おじさまの名前を言つてご用があったら、お家に来て頂戴と言おうかと考えたけど、お名前を出すのが悪いと思つてやめといたわ。」

「名前なんか出すのはよしなさい、言わないのが、りこうなんだ。」

「じゃ、あたい、りこうだったわね。」

「自然にふせぐ手をきみは知っていて、それを自分で考えないでやっていたことは、やはり身をまもることを知っていた訳なんだ。」

「おじさま、」

「なに。」

「あたい、お腹がきゆうに空いちゃった。お茶一杯飲まない

でいたんですもの。」

「では麩もおあがり。」

「あたい、麩なんかぐにやぐにやしていや、塩からい、わかさぎの乾干がつつつきたいんですもの、くたびれちゃった。」

「じゃ乾干をおたべ。」

「あ、美味しい、おじさま、井戸水を汲んで来てちょうだい、柔らかい水にじつと、少時、かがみ込んで見たいわ。」

「よしよし、ほらおいしい井戸水だよ。」

「藻も少しいれてよ、古いのは棄てちゃって、ごわごわした生きのいいのがいいわ。あ、わすれていた。どう、この齒は立派でしょう。」

「あつてもなくてもいいのに、おしゃれだね、きみは、」

「だって晩にはしくしくと何時までも疼いて、どうにも手がつけられないんですもの、おじさまがそんなに冷淡なこと仰有ると、化けて出るわよ。」

「金魚が化けられるものかい。」

「あたいね、ときどきね、死んだら、も一度化けてもいいからお逢いしたいわ、どんなお顔をしていらっしやるか見たいんですもの。あたい達の命ってみじかいでしょう、だから化けられたら、何時か化けて出てみたいと思うわよ。」

「まだまだ死なないよ。夏は永いし秋もゆっくりだもの、冬は怖いけれど。」

「冬は怖いわね、からだの色がうすくなっちゃうし、おじさまはお庭に出なくなるし、ねえ、冬になったらお部屋にいてね。」

「入れて大事にしてやるよ、暖かい日向にね。そしてわかさ

ぎの乾干をやるよ。」

「鏡のついた箱入の餌もね、こまかく叮嚀にかなづちで砕いて、」

「溝川のみじんこ・みみずもさがして歩くよ、きみはあれが好きだから。」

「あ、嬉しい。おじさまは、何時も、しんせつだから好きだわ、弱っちゃった、また好きになっちゃった、あたいって誰でもすぐ好きになるんだもん、好きにならないように気をつけていながら、ほんのちよつとの間に好きになるんだもの。此間ね、あたいのお友達が男の人に、一日じゅうお手紙を書いていたわ、人が好きになるということは嬉しいことのなか

でも、一等嬉しいこととございます。人が人を好きになるとほど、うれしいという言葉が突きとめられることがございません、好きという扉を何枚ひらいて行っても、それは好きでつくり上げられている、お家のようなものなんです、と、そのかたの文章がうまくて、後のほうでしめくりをこんなふうにつけてありました。わたくし旅行先でお菓子を沢山買って、それを旅館に持ったってかえって眺めていると、誰が最初にお菓子を作ることを考えたのしょうと、そんな莫迦みたいなことも書いてございました。」

「きみはいくつになる。」

「あたい、生れて三年経っているの、だから、こんなにからだが大きいの。」

「人間でいうと二十歳くらいかな、頭なぞがっちりしているね。」

「ええ。でも、おじさま、人を好くということは嬉しいこと

でございますという言葉は、とても派手だけれど、本物の美しさでうさうさしているわね。」

「それ以上の言葉は先ず見つからないね、女の人の言葉としては正直すぎているくらいで、誰でもそうは書けないものがあるね、大胆な表現でしかも極めて普通なところがいいね、どんな人なの。」

「逢ってみたいの。」

「きれいな人かどうか、それが気がかりなのさ。」

「それはそれはきれいな人よ。せいは低いけど。」

「何をしている人なんだ。」

「或る雑誌の編集をしている方、海棠夫人という名前がついている方なの。」

「その手紙を貰った相手は誰。」

「歌舞伎俳優だったのだけれど、いまは、たまにしか出ない名のある俳優なのね、おじさまはきつと名前をいえばお判りでしょうけど、あたい、お友達から口どめされているから、言えないわ。けどね、人を好くということは嬉しいことでございますというのは、とても、たまらないよい言葉ね、人を好くということは、おじさま、言つてごらん遊ばせ。」

「いやだよ、いい年をしてさ。」

「ね、一ぺんこっそりでいいから言つて見て頂戴、男の人の口からそれを聞いてみたいんだもの、人を好くということは嬉しいことでございます、……」

「人を好くということは、……」

「嬉しいことでございます、と、息をいれずにひと息に仰有るのよ、おじさまったら、齒がゆくてじれったいわよ、人を

好くということは嬉しいことでございますと言うのよ。」

「人を好くということは、……」

「また吃^{ども}ったわね、ずっと一氣につづけるんだと言っているじゃないの。」

「人を好くすることは、……」

「すぐ、あとを言いつづけるのよ。判らない方ね。」

「僕にはともいえない、かんにんしてくれ。」

「何て年よりのくせにはにかみやだろう、もう言わなくてもいいわよ。」

「慍^むったね、じゃ言うよ、人を好くということは人間の持つ一等すぐれた感情でございます。」

「ちがうわね、勝手に言葉を作つてはだめじゃないの、人を好くすることは、ほら、早くさ。」

「人を好くすることは、……」

「何てじれったいおじさまでしょう、それで小説家だの何のつて可笑^{おか}しいわよ、あたいの言葉の終らない前に続けるのよ、人を好くすることは、なのよ、あら、黙っちゃった。」

「……」

「言わないの、早くさ。」

「僕はだめだ、きみひとりで其処で何度でも言ってくれ、僕はばかばかしくなるばかりだ。」

「わかさがないのね。」

「何も無いよ、すっからかんだよ、好きでも口にはいえない言葉というものがあるもんだ。」

「あたいね、おじさまみたいなお年よりきらいになっちゃった、幾らいつでもテンポが鈍^{おろ}くて、じれじれして噛みつきた

いくらいだわ。」

「金魚に噛みつかれたって痛かないよ、いくらでも噛みつくがいいよ。」

「あんなことを言っている、あたいだって一生懸命に噛みついたら、おじさまの瘦せた頬のになんか、咬^かみとるわよ。」

「怖いね、大きな眼をして。」

「おじさまと遊んでやらなかったら困るでしょう。呼んだって返事しないからね。」

「惔るな、あやまる、きみが遊んでくれなかったら、誰と遊んだらいいんだ。」

「じゃ、先刻のことをもう一遍くり返しているのよ、ね、いいこと、人を好くということは、……」

「人を好くということは嬉しいものです。」

「おじさま、早く起きて。」

「すぐ起きるよ、石が着いたらしいね。」

「どんどん着いているわよ、表に出て見て驚いちゃった。道ばたは通れないくらい積み上げて行っただわ。」

「まだまだ運んでくるよ、そうだな、今日一杯運搬はかかるね。」

「あんなに石をお買いになって、何をなさるおつもりなの。」

「あれで石の塀をつくるんだよ、石の塀は燃えないからね。」

「此間の火事でお懲りになったのね、あんどき、あたいくらいある大きい火の粉がどんどん降って来たわね、あたい、水の底から見ていると、しゅっと水に落ちた火の粉で、あたいのいるところの水まで熱くなっちゃった。おじさまが来なか

ったら水が熱く沸いて了って、死んでいたかも知れないわ。」

「平たくなつて水底でふるえていたね、眼だけ大きく開けて、」

「でも呼んだら来てくださって、たすかったわ、あたい、あれからずっと眼が焼けたようにへんになっているのよ。」

「まるで二足ずつ重なつてふくれて見えた程だ、金魚に火事と来たら、それ以上の赤い色ないね、だからあの晩からおじさんは考え続けたのさ。」

「石の塀をおつくりになることでしょう。」

「今までの竹の胡麻穂だと燐寸一本で、火が一面にひろがるからね、まるで家の周囲に燃えやすい焚^{たきつけ}附を置いていたようなものなんだ。」

「火事があったら小母さまの足が立たないから、なかなか逃げ出せないし、あたいは小ちゃいからお手伝いができないもん、その前にあたいなんかあぶられて死んじまっているかも知れないわ、おじさまはどうして小母さまを背負い出すおつもりなの。」

「そこで塀は石につくりかえることに考えついたんだ。おじさんが死んだ後に垣根を結い返す必要もないしね、胡麻穂の垣根ってお金がかかるんだ、息子や娘がいてもみんなお金がとれないから、垣根をやり代えることも、一年遅れになり五年八年と遅れてボロ家にボロの垣根になってしまふ、きみはおじさんの大事な友達だけれど、それはただの金魚というぴかぴかのおさかなに過ぎないしね。」

「何の役にも立たないわね、ただ、おじさまの精神的なパトロンみたいにはなっているけど、一緒に寝ることもできない

わね。」

「生意気なことは、誰よりも生意気だし、……」

「おじさま、早く起きてよ。」

「いますぐ。」

「おじさま、あれ何て石なの、まぶしいくらい白っぽくて、かさかさして眼に痛い。」

「あれは大谷石という石なの、あれで家のまわりをぐるっと包んで、火事があっても今までのように燃える心配がないだろう。七段くらい積み上げればね。」

「まるでお城みたいになるわね、気がついてよかったわ。」

「とうに気がついていたけれど、おじさんには、そんなお金がいままではなかったのだよ。」

「じゃ、いまあるの。」

「このごろのおじさんはね、やっと石堀くらい作れるようになった。人間は一生かかっていながら、垣根も結えない時が続いた訳だね。」

「おじさまは何でも一生かかってなさる事はしているわね、お庭、やきもの、お仕事、みんな晩成^{おくて}なのね。」

「なまいき言うな。」

「おじさま、いろいろお物入りばかりつづくけれど、あたい、おねがいが一つございますけれど、とうから考えていたんだけれど、こんどはついでに作っていただきたいんです。」

「どういう頼みか、いつてごらん。」

「あたいの家もついでにつくってほしいの、あの石でまわりを囲うて広びろとしたお池みたいにしていただいて、真中にりゅうとした噴水をしかけて、噴き水がしたしたといちに

ち、山あいの滝のようにしぶくお家がほしいんです、その中であたい、おじさまに扇の孔雀のように泳いでお見せすることも出来るし、おじさまの好きな大口を開けてうたうことも出来るわ。」

「だんだんぜいたくになってくるね、作って上げるよ、そのつもりで黒い石もたくさん買って置いたんだ。」

「あ、嬉しい、あたい、白い石ばかりかと思って内々不服だったけれど、黒い石もお買いになつていたの、とても嬉しいわ、だからおじさまは気が利いていて好きだというのよ、尾のところにお触^ふりになつてもいいわ、くすぐったくないよう、そよそよとお触りになるのよ。おじさま、尾にのめのめのものがあるでしょう、あれをお舐^なめになると、あんまりあまくはないけど、とてもおいしいわよ、しごいてお取りになつてもいいわよ。」

「そんなことしたら、きみは泳げなくなるじゃないか。」

「すぐ作れるもの、いくらでも次からのめのめのあぶらが湧いて出てくるわ。あたい、あのめのめの沢山湧いている日が一等うれしい日なのよ、こう言っているまにぐんぐん湧いてくるわ。」

「尾の附根が光り出したね、ちょいと失礼だけれど、お尋ねしますがね、慍^おり出したらいけないよ。」

「なあに、」

「一たい金魚のお臀^しって何処にあるのかね。」

「あるわよ、附根からちよっと上の方なのよ。」

「ちつとも美しくないじゃないか、すぼっとしているだけだね。」

「金魚はお腹が派手だから、お臀のかわりになるのよ。」

「そうかい、人間では一等お臀というものが美しいんだよ、お臀に夕栄えがあたってそれがだんだんに消えてゆく景色なんて、とても世界じゅうをさがして見ても、そんな温和しい不滅の景色はないな、人はそのために人も殺すし自殺もするんだが、全くお臀のうえには、いつだって生き物は一足もないし、草一本だって生えていない穏かさだからね、僕の友達がね、あのお臀の上で首を縊りたいというやつがいたが、全く死場所ではああいいうつるつるてんの、ゴクラクみたいな処はないね。」

「おじさま、大きな声でそんなこと仰有ってはずかしくなるじゃないの、おじさまなぞは、お臀のことなぞ一生見ていても、見ていない振りしていらっしやるものよ、たとえ人がお臀のことを仰有っても、横向いて知らん顔をしていてこそ紳士なのよ。」

「そうはゆかんよ、夕栄えは死ぬまでかがやかしいからね、それがお臀にあたっていたら、言語に絶する美しさだからね。」
「おばかさん、そんなこと平気で仰有るなら、あたいたい、もう遊んであげないわよ。人間も金魚もいつもきちんとしたことばを口にすべきだわ。お臀って自分で見られないように、後ろ側についていて、人間の中でも一生自分のお臀を見ないで死ぬ人さえるのに、おじさまったらその秘密がわからないの、どんな映画だってお臀だけは写さないわよ。」

「このあいだ『殿方ごめんあそばせ』って映画で、ブリジット・バルドーがお臀を見せるところがあったよ。可愛いお臀だった、もつとも、はなはだ瞬間的のものではあったがね。」

「おじさま、いやなところばかり見ていらっしやるのね、あたいたい、おじさまと遊ぶのがまたいやになっちゃった。」

「人間でも金魚でも果物でも、円いというところが凡て一等美しいんだよ、十くらいの子のおしっこをしているのを外で見かけると、吃驚^{びく}していくらおじさまでも顔を反けたくなるね、自分というものを知らないでしていることが、それを全部知っている側から見ると、純潔以前の野蛮な感情で自分自身でどやしつけられるんだ。それが余りに不意に見なければならぬ状態に置かれた自分を責めたい気分だね、こまるね、そんな時はね。」

「あたいたいね、おじさまがゴドモのおしっこしているのを見てさえ、自分のどこかに響かして考えようとするのは、不倖だとおもうわ、誰もそこまで考えをつきこんでいる人いないわよ。」

「そうかな、厭らしい事くらい反省を促してくるものがない筈だが、人間の子供のすることなぞ、一遍におじさまを遣^や附^つけてくるんだ。いわば不倖かも知れないね、この不倖を不倖に感じない人間に、たまたま破廉恥な犯罪がうまれてくるんだね、今までにそのために何十人かの少女が殺されたかわからないね。おじさまだって自分を怖い処に立たせて見て、どれだけの分量で自分に厭らしさがあるかを調べているんだが、何時も恐ろしい結果がヘビのように首をあげてくるね、裁判官という人達はどれだけ他人をしらべていながら、犯罪者から教えられ又救われているか判らないね。だから人間は自分にあたえられたお臀ばかりを見つめくらしていさえすれば、他に苦情がおこらないんだ。たいがいの人間はそうしている

んだよ。」

「おじさまは？ おじさまだってまだお臀が見たいんですよ。」

「そりや見たいさ。併し問題が夕栄えの景色から外したお臀のことになると、だんだん声が低くなるし大ぴらには言えなくなるね、おじさんの僅かばかり受けた教育がそうさせてくるんだね、人間に書物とか教養があたえられたことは、僕一人にとつても大へんな感謝に値するわけだね。」

「おじさまはそんなに永い間生きていらつして、何一等怖かつたの、一生持てあましたことは何なの。」

「僕自身の性慾のことだね、こいつのためには実に困り抜いた、こいつの附き纏うところでは、月も山の景色もなかったね、人間の美しさばかりが眼にはいつて来て、それと自分とがつねに無関係だったことに、いよいよ美しいものと離れることが出来なかったね、やれるだけはやって見たがだめだった、何も貰えなかった、貰ったものは美しいものと無関係であつたということだった、それがおじさんにたあいのない小説類を書かせたのだ、小説の中でおじさんはたくさんのお人を持ち、たくさんの人を不倖にもしてみた。」

「おじさま、いい考えがうかんだのよ、おじさんとあたいのことをね、こい人同士にして見たらどうかしら、可笑しいかしら、誰も見ていないし誰も考えもしないことだもの。」

「そういう場合もあるだろうね、乞食のように生きてゆくひとは、犬や猫と生涯をおくることもあるからな、犬や猫は寝ていると女くさくさくなってゆくけれど、金魚とは寝ることが出来ないしキスも出来はしない、ただ、きみの言葉を僕がつく

ることによつてきみを人間なみに扱えるだけだが、まアそれでもいいね、きみと恋仲になつてもいいや、僕には美しすぎた過ぎ者かも知れないけれど、瞳は大きいしお腹だけはデブちゃんだけだね。」

「あたいね、おじさまのお腹のうえをちよろちよろ泳いでいてあげるし、あんよのふとももの上にも乗つてあげてもいいわ、お背中からのぼつて髪の中にもぐりこんで、顔にも泳いでいて、おくちのところにしばらくとまっていでもいいのよ、そしたらおじさま、キスが出来るじゃないの、あたい、大きい眼を一杯にひらいて唇をうんとひらくわ、あたいの唇は大きいし、のめのめがあるし、ちからもあるわよ。」

「しまいに過つてきみを呑みこんで了つたらどうなる、それが一大事件だ。」

「そしたらお腹の中をひとまわりして、また上唇のうえにもどつて出てくるわよ、金魚ですもの、ねばり気のあるところでは、あたいのからだはどんなに小さくも伸び縮みすることが出来るし、早く泳ぐこともできるのよ。どう、お腹のうえを泳いであげたら、おじさまは擦くすくったくなり嬉しくなるでしょう。」

「そうね面白いだろうね、けど、擦くすくったくてかなわないだろう、ぴちぴち跳ねられたら？」

「そつとして上げるわ、慎重に。」

「なにぶん、よろしく頼むよ。」

「では恋人になるわね。」

「何て呼んだらいいんだ、名前からつけなきゃ。」

「赤い井のなかの赤子、赤井赤子ってのはどう。」

「いいね、あか子、赤井赤子というのはちょっと変っていて、呼びいいね。ではそう呼ぶことにしよう。」

「それからね、いろいろ物を買っていただかなくちゃ、あたし、何一つ持っていないんですもの、頸飾だの、時計だの、時計はきん色をしたぴかぴかしたのね、それから指環もいるけど靴だの洋服だの、……」

「きみがそんな物を着たり嵌めたりしたら、お化けみたいじゃないか。」

「お化けでも何でもいいわよ、買っていただけなの。」

「買うよ、おじさんの買物を控えめにすれば、何でも買える。」

「も一つ肝腎なことは毎月小遣どれくらい貰えるの、それを決めてかからなきゃ、それが一等肝腎なことだと思うわ。」

「そうだな、千円もあればいいんじゃないか。」

「千円ぽちで何か買えるとお思になるの、どんなにすくなくとも五万円いただかなくちゃ暮せないわよ。」

「五万円という金はおじさんの小説一つ書いたお金の高だよ、それだけ毎月きみに上げたらおじさんこそ、どう暮しているか判らない、まアせいぜい一万円くらいだよ、それで妙なかつたら恋人はやめだ。」

「こまるわ、一万円じゃ。じゃね、クリイムだのクチベニのお金は時々べつの雑費として出していただけです？」

「それは随時に出すことにするよ、現金では一万円以上はとも出せないよ、金魚のくせに金取ってどうするつもりなの。」

「じゃ一万円でいいわ、ふふ、一万円の恋人ね、あたし、はたらくことにするわ、縁日の金魚だらいに出てゆくわ。」

「そしてどうする。」

「買って行った人の家から、晩方にはおじさまの家に直ぐ逃げてもどるわ、あたしは一足で三百円が懸値かけねのないおねだんだから、逃げ出してはまた別の金魚屋に売られて、またおじさまの処に戻って来るわ。」

「見附みづけかったらどうする、殺されるぜ。」

「人間にんげんって吝けちだから三百円もする金魚は決して殺しはしないわよ、それに、皆さんは金魚だけはどんな残酷屋さんでも、殺すもんですか、金魚は生涯可愛がられることしか、皆さんから貰ってないもの、金魚を見て怒る人もまた憎む人もいなし、金魚は愛されているだけなのよ、おじさまも、それだけは頭に入れて置いてあたいをいじめたり、怒らせたりしちやだめよ。」

「判った、きみはえらい金魚だ、娼婦であるが心理学者でもある金魚だ。」

「昔、支那の皇帝がお池で金魚の衣裳を着けた女達を泳がせたことがあるの、それ以来金魚は擬人法をならうことが出来たし、水の中でうんこをすることも覚えたの。」

「じゃ何かい、そのお池で誰かがうんこをもらした女がいたの。」

「そうらしいわ、金魚唐史に出ているわ、支那から泳いで来たというのはでたらめだね。きつと商人達がもうけるためにお船で持って来たのよ、おじさま、もう、そろそろ寝ましょうよ、今夜はあたしの初夜だから大事にして頂戴。」

「大事にしてあげるよ、おじさんも人間の女たちがもう相手にしてくれないので、とうとう金魚と寝ることになったが、おもえばハカナイ世の中に変ったものだ、トシヲトルという

ことは謙遜なこと 矜おびただしいね、ここへおいで、髪をといえあげよう。」

「これは美しい毛布ね。」

「タータン・チェックでイギリスの兵隊さんのスカートなんだよ、きみに持って来いの模様だね。」

「これ頂戴、」

「何にするの、厚ぼったくて着られはしないじゃないか。」

「大丈夫、スカートにいたします、まあ、なぜお笑いになるの。」

「だってきみがスカートをはいたら、どうなる、」

「見ていらつしやい、ちゃんと作ってお見せするから。どう、あたい、つめたいからだをしていでしょう。ほら、ここがお腹なのよ。」

「お、冷たい。」

「むかしね、おじさま、」

「また秦の始皇が大きな鯉と寝て風邪をひいたという話でしょう、それなら何遍も聴いたよ、それでなきや唐の姫達が一疋ずつ金魚を口にふくんで、皇帝の穩座おんざを飾ったという話だろう、うまいことを考えついたものだね。金魚を啜くえて伺候するなんてね。」

「むかしむかしね、おじさま。」

「ふむ。」

「あたい達の眼があんまり動かないので、瞬きをして表情を多様にするための眼のお医者様がいたのよ、いまの眼を大きくする病院みたいところなのよ、その眼医者がたいへん流行はやっちゃって、みんな、眼の治療に行ったけれど、後でよく氣

がつくと、眼ん玉が引っくり返っただけで依然として、金魚の眼はまたたくことが出来ないで、じっとしているじゃないの。」

「金魚の眼はいやに動かない眼だな。」

「だから紅鱗こうりんと競きい、瞳孔どうこう人これを見ずという悲しい詩があるくらいだわ、おじさま、そんなに尾っぽをいじくっちゃだめ、いたいわよ、尾っぽはね、根元のほうから先の方に向けて、そっと撫でおろすようにしないと、弱い扇だからすぐ裂けるわよ、そう、そんなふうに水のさわるように撫でるの、なんともいえない触りぐあいでしょう、世界じゅうにこんなゆめみたいなものないでしょう。」

「先ず絶無といっているいいね、人間なら舌というところだ。」

「あとでお腹の掃除もしてあげるわ。」

「何処に行くの、じっとしていたまえ、」

「背中のようなすを見てから、胸のうえに登つてと、まるでお山が続いているみたいね。人間一人をつかまえてしらべて見ると、とても、大きいくじらみたいなものだわね。」

「寝たまえ、おしゃべりはいい加減にして寝たまえ。」

「ええ。おじさまは明日は何をなさるおつもり。」

「明日はね、石の堀をつくるんだ、職人衆の来る前に起きて、指図をしたり形をきめなければならぬんで忙しいんだよ。」

「あたい、どうしていたらいいの。」

「あたいは一人で遊んでいたらいいな。目高を呑みこんだり吐き出したりしていればいいよ。」

「おじさまは遊んでくれないの、つまらないな。」

「きみと遊んではかりいられないよ、そのほかに仕事もある

んだ。」

「また小説でしょう、あたいのことなぞ書いちゃいやよ、書く人と書かれる人のちがいは、大変なちがいだから書かないでよ、」

「ところがね、おじさんは此間から金魚はなぜあんなみじかい生涯を生きなければならぬかと、そんな事をしじゅう、考え続けているんだ、たとえば目高は人間にしたしまないが、金魚はあしおとがすると、すぐ集まってくる、そこに目高と金魚の遠近が人類とむすびついて来る。」

「つまらない事を仰有るわね、それより、此方を向いて頂戴、ことわざに曰く作家老いて悲境に陥るということがあるが、おじさまもその部類ね、かくごはしていた、なんて仰有るけど、こうみるとすでにふつうの人の百歳の年齢に足をふみいれているわね、足はがさがさして鹿の足のごとく、お背中はやつと張っているだけね、遠い遠い百歳がもうやって来ているわね、七十歳でもう百歳の人、あるだけを書き、あるだけを叩き売った心のぼろを提げている踵のヤブれた人、そんなひとがさ、あたいのような若いのと一緒に寝るのは、百歳にして恋を得たと矜^{ほり}がましく仰有っても、いいくらいよ、あたいはもう金魚じゃないわね、一枚の淡紙同様のおじさまだつて生きていらっしゃるんだもの、一たい何処にいのちがあるのよ、いのちの在るところを教えていただきたいわ。」

「おじさんはおじさんを考えてみても、いのちを知るのに理窟を感じてだめだが、金魚を見ていると却^{かえ}つていのちの状態が判る。ひねり潰せばわけもない命のあわれさを覚えるが、おじさん自身のいのちをさぐる時には、大論文を書かなければ

ばならない面倒さがある。」

「論文なんていやね。そしてあたいが麩をたべているときに、いのちを感じると仰有りたいんでしょう。あたいの生きていることは、おじさまを困らせている時ばかりだ。」

「スーツを買え靴を買えという時か。」

「そのほかにもある。追々わかってくるわ。しまいにおじさまはあたいを煩さがって、何処かに捨てに行きやしないかと思うことがあるわ。でなきや殺してしまうかの二つだわ。」

「きみが木々の間を泳ぎまわりおじさんに蹤^{あと}いているあいだ、おじさんはきみを大事にしているんだ、きみは何処にでも匿すことが出来るし邪魔にはならない。」

「おじさま、何時あたいが木の間に泳いでいるのをごらんになったの、」

「明るい日の中の梢に何だろうと見ていると、きみの泳いでいるすがたが見えていた。池を見るときみはいなかったのだ。きみは恐ろしい金魚だ、木の間をつたい、木の下において行ったが、いまでも本当の事だとはおもえないくらいだ。」

「あたいだってあれは本当のことに思えないわ。おじさま、仰向いて寝てよ、あたい、お腹のうえだと、とてもお話しよいのよ。」

「おじさんの方からは、顔がよく見えないじゃないか。」

「これでいい?」

「あ、それでいい、だいぶ、からだが温まって来たね、お腹がふにやふにやしてきたじゃないか。」

「お腹が空いてきたのよ、お水と餌とを持って来て頂戴、なんか大きな鉢のようなものに水を一杯入れてきてね、時どき、

ざんぷりとはいらないと呼吸ぐるしいわ、ついでに揚タオルもね、早くね。」

「はい、はい。」

「おじさまはしんせつね、美味しいお水ね、冷蔵庫から取り出して来たのでしよう、おう冷たい、あ、色が変わるくらい冷たいわね。」

「はい、干鰯^{ひたら}。」

「こまかく刻んでくださったわ、塩^{しよ}ばくていい気持、おじさま、して。」

「キスカい。」

「あたいの冷たいけれど、のめつとしていいでしょう、何の匂いがするか知っていらっしゃる。空と水の匂いよ、おじさま、もう一遍して。」

「君の口も人間の口も、その大きさからは大したちがいはないね、こりこりしていて妙なキスだね。」

「だからおじさまも口を小さくすぼめてするのよ、そう、じつとしていてね、それでいいわ、ではお寝みなさいまし。」

二、おばさま達

「石の上に子供達が集まって遊んでいるわよ、あれ、崩れたら、下敷きになっちゃうわ。」

「そりゃ困るね、そんなに高く積み上げて行ったのか。」

「上へ上へと積み上げたもんだから、一等上の方から、地面を見ていると、眩暈^{めまい}がして来るくらい高いわ。」

「きみ行つて、子供を下ろしてしまえ。」

「ええ、そう言ってくるわ。あの、皆さん、その石の上で遊んじやだめ、危いわよ、崩れて下になったら、死んじまう、お利口さんだから別の処に行つて遊んで頂戴、ほら、ね、きゆうには降りられないでしょう、さあ、あたいが抱っこして上げるから、彼方に行つて。」

「皆、行つたか。」

「行つたわ、あたいの顔を不思議そうに見ていて、あの人誰だい、あんな人、あの家で見たことがないじゃないか、と言つていたわ。」

「きみは派手な顔をしているからな。」

「おじさま、また来たわよ、怖いお隣の地主さんが来たわ、きつと、離れがお隣の地所に屋根をつん出しているのを、今度は何とかしなきゃね。」

「離れを一尺くらい、がりがり削り取るんだね。」

「こんどは石の塀だから、ふつうの場合とちがうわよ、どうなさる。」

「大工を呼んで境界ぎりぎりに削り取るんだ。でないと裁判沙汰になるし、法律では幅一尺の十五間分の、つまりその三十年間の地代も払わなければなくなる、やはり離れを毀^こすことになるんだ。」

「可哀そうなおじさまね、でも、やむをえないわね。」

「やむをえないね。併し片側の出来栄えは、なかなかいいじゃないか。やつと今度こそ生涯の垣根が出来た訳だ。」

「おじさま、此処へいらっしゃい、石塀の上に腰かけていると、ずっと町の彼方まで見えて来て、いい気持だわよ。」

「高きに登るといふことは、いいね。石塀を作つて置いて宜

かった。」

「あたいね、おじさまがおはなれをお毀しになるか、そのま
ま突っぱねるかどうかと、じつと見ていたわ。」

「この前、そうだな五年くらい前だ、お隣のおじさんが来て
ね、あなたも名譽のある方だから、いますぐとは申しません
が、塀を作りかえるような事があつたら、地所は還してくだ
さいと、そう言われていたんだ、地所といったって、僅か一
尺に足りない軒先だけがお隣に飛び出していたんだがね、そ
こでお隣では、後日のために一枚の書附をくれといってね、
おじさんは書附を書いて渡して置いたんだよ。」

「どう、お書きになった。」

「必要の時期にははなれを取毀しても、地所の出っ張りを引
っこめまずと書いたね。」

「その時期が来て了ったのね、今度は石の塀だから永い間壊
れないから、軒先を引っこめたのね、だから、おはなれのお
床の間がまがつちやつた。」

「だから素直にこわして雨落ちも、お隣に落ちないようにし
たんだ。」

「地所というものは、憂鬱な境をもっているものね。」

「人間はむかしから国と国の間でも、そのために戦争もして
来たんだし、個人の間でも、がみがみ咬み合ったもんだよ、
だから、おじさんは地所というものは、一坪も持っていない、
此の家も借地だし軽井沢の地所も借りている。」

「軽井沢に一度連れて行ってよ、汽車の中でも、温和しくし
ていますから連れてって。」

「土瓶に水をいれて、きみをつれて行くか。」

「駅々で水をかえてくださるなきやだめ。水が列車でゆれど
おしだから、あたい、ふらふらになっちゃって、とても草臥
れてしまうのよ。」

「山の水はきみにはどうか。」

「山の水にひたると、あたいのからだは燃え上って来るし、
瞳は一そうキラキラになるわ。あたい、おじさまと毎日山登
りをするわ。ね、考えても愉しいじゃないの。魚は木を越え
山に登ると、誰かもいったじゃない？ あたい、せいぜい美
しい眼をして見せ、おじさまをとろりとさせてあげるわ。」

「きみは人間に化けられないか。」

「毎日化けているじゃないの、これより化けようがないじや
ないの。」

「もっと美しい女になって、見せてほしいんだ。」

「おじさまはどうして、そんなに年じゅう女おんなって、女
がお好きなの。」

「女のきらいな男なんてものは、世界に一人もいはいしないよ、
女がきらいだという男に会ったことがない。」

「だっておじさまのような、お年になっても、まだ、そんな
に女が好きだなんていうのは、少し異常じゃないかしら。」

「人間は七十になっても、生きているあいだ、性慾も、感覚
も豊富にあるもんなんだよ、それを正直に言い現わすか、匿
しているかの違いがあるだけだ、もっとも、性器というもの
はつかわないと、しまいいには、つかい物にならない悲劇に出
会すけれど、だから生きたかったら、つかわなければならな
いんだ、何よりそれが恐ろしいんだ、おじさんもね、七十く
らいのジジイを少年の時分に見ていて、あんな奴、もう半分

くたばってやがると、蹶^う飛ばしてやりたいような気になって見ていたがね、それがさ、七十になってみると人間のみずみずしさに至っては、まるで驚いて自分を見直すくらいになっているんだ。」

「性器なんていやなこと、平気でおっしゃるわね。そんなことは、口になさらない方が立派なのよ。」

「心臓も性器もおなじくらい大事なんだ。なにもしがましいことなんかないさ、そりゃ、おじさんだって性器というものは、こいつが失くなってしまえば、どんなに爽やかになるかも知れないと、ひそかに考えたこともあったけれどね、やはりあった方がいいし、あることは、どこかで何事かが行える望みがあるというもんだ。」

「そんなこと大声でおっしゃっては、あたいが赧^はくなつて了うじゃないの。人間のたしなみの中でも、一等謹んでそつとして置くべきことなのよ、口にすべきことじゃないわ。」

「そりゃそつとして置きたいんだよ、けれども一遍くらいは七十の人間だって百歳の人間だって、生きて脈打っていることを知りたいんだよ。」

「じゃ、おじさまはわかい人と、まだ寝てみたいの、そういう機会があったら何でもなさいますか？」

「するさ。」

「あきれた。」

「だからきみとつきあっているじゃないか。おじさんが牧師や教員のまねをしていたら、生きることに損をする。そりゃ綺麗に生きるためにも、したいことはするんだ。きみはいま、おじさんのふとももの上に乗っているでしょう、そして時々

そつと横になって光ったお腹を見せびらかしているだろう、それでいて自分で羞かしいと思ったことがないの。」

「ちつとも羞かしいことなんか、ないわよ、あたいたい、おじさまが親切にしてくださるから、甘えられるだけ甘えてみたいのよ、元日の朝の牛乳のように、甘いのをあじわっていたいの。」

「それ見たまえ、ちんぴらのきみだって、自分のつくったところに、とろけようとしているんじゃないか。何も解りもしないきみが、こすり附けたり噛みついてたりしても、それで些^ちつとも羞かしい気がしないのは、きみが楽^{らく}なことをらくに愉しんでいるからなんだ。」

「あら、そうなるか知ら。だったら、羞かしくなるわね。」

「亢奮してからだじゅうぴかぴかじゃないか。これでおじさんの先刻から言ったこと解っただろう。」

「解ったわ。ごめんね、なんだかあたいたい、ふだん考えていること匿^{かく}していたのね。」

「実際に行うていながらね。」

「つじつまが合わなかったわね。」

「つまり年をとると、本物だけになって生きかえっているところがあるんだよ。」

「だから若いひとが いいの。」

「こちらが少年になつていながら、結局、若いのがよくなる。」

「けどね、おじいちゃん若い人を好くというのは、ちょっと、いやあね。見苦しいわ。」

「ちつとも醜悪じゃない、当り前のことなんだ。」

「だから、あたいたいのような若いんじゃないくては、だめだとい

うの。」

「きみより若いひとはいえないね、たった三歳だからね。三歳のきみが七十歳のおじさんと、腕をくんで山登りするなんて、世界に二つとない珍風景だね。きみはきまりの悪い思いをしないか。」

「あたいは本当は、おさかなでしよう。だからちつとも羞かしくないわ。おじさまは他の方^{かた}におあいになつたら、きつとお困りでしょうに。」

「なるべく隠れて歩きたいな、発^み見^つけられたつて構いはしないけど、おじさんの生きる月日があとに詰つてたくさんないんだもの、だから世間なんて構つていられないんだ。嗤^{わら}おうとする奴に嗤^{わら}つて貰い、許してくれる者には許してもらうだけなんだよ。きみはきらいかも知れないけど、その点で実に図々しく大手を振つて歩けるんだよ、世間で手を叩いて莫^ば迦^か扱いにしたつて平気なもんだ。生きるのに何を皆さんに遠慮する必要はあるもんか。」

「おじさまはとても図太いことばかり、はつとすることをぬけぬけと仰有る。そうかと思うと、あたいの尻を拭いてくださるし……」

「だつてきみのうんこは半分出て、半分お尻に食つ附いていて、何時も苦しうで見ていられないから、拭いてやるんだよ、どう、らくになつただろう。」

「ええ、ありがとう、あたいね、何時でも、ひけつする癖があるのよ。」

「美人というものは、大概、ひけつするものらしいんだよ、固くてね。」

「あら、じゃ、美人でなかったら、ひけつしないこと。」

「しないね、美人はうんこまで美人だからね。」

「では、どんな、うんこするの。」

「固いかんかんのそれは球みたいで、決してくずれてなんかいない奴だ。」

「くずれていては美しくないわね、何だかわかつて来たわよ。」

「きめの織^はかいひとはね、胃ぶくろでも内臓の中でも、何でも彼でも、きめが同じようにこまかいんだよ、うんこも従つてそうなるんだ。」

「おじさま、うかがいますが、あたい美人なの、どうなの教えて。」

「きみは美人だとも、きみのまわりに何時も十人くらいの子供が、うやうやしてきみを飽きることも知らないで眺めている。」

「どの子もお金を持っていないで、眺めているだけね。可哀想ね、子供はお金を持つてはいけないの。」

「子供はほかの事にお金をみんな使つてしまつて、最後に金魚屋の前を通つて、失^し敗^まつた、あんなにお金はつかうんじやなかったと、悲しげに金魚を眺めているだけなんだよ。何時も何時もそうなんだよ。」

「わかつたわ、で、みんな悲観して茫然と立っているだけなのね。金魚は買えないし、見れば見るほど美しい、だから、先刻から一時間も立つて眺めている、……おじさま、金魚を一尾ずつでもいいから、子供達に買ってあげてよ。」

「うむ、ほら、お金だ、きみが買ってみんなに頒けてやるがいい。」

「ありがとう。子供の顔ったら悲しそうで見ていられないわ。あら、あの金魚屋さんは、凝乎と先刻からふしぎそうにあなたの顔を見ている、……」

「どこかに見おぼえがあるらしいんだな。」

「あたかも彼の顔だけはわすれることが出来ないわ。毎日彼の顔ばかり見ていて、そだって来たんだもん、いまあたい、おじさまの頬つぺを引っぱたいても、慍らないでよ。」

「どうしてそんな事をする。」

「あたいがえらくなつた証拠を、金魚屋さんの眼に見せてやるのよ、きつと驚くでしょう。」

「じゃ、引っぱたいてもいいよ。」

「ごめんよ、びつしりとゆくわよ、痛くないこと、」

「ちつとも、」

「金魚屋さんたら惻れちゃつて、此方をきよんとした眼で見て、口を開けたまんま言葉も出ないふうね。」

「他の者には女に見え、金魚屋には金魚に見えるきみが不思議なんだろう。」

「その金魚がお金を持ってね、金魚を買いに行くということ嬉しいお話じゃないの、ほらね、子供達がみんな此方を向いて、金魚をすくい出し始めたじゃないの。坊や、大きいのを上げるわよ、おばちゃんがお金払うから、心配しないで、どんどん、すくい上げていいのよ。」

「おばちゃん、十人もいるんだぜ。」

「何十人いたっていいわよ、おばちゃんは、きょうは、お金はうんと持っているんだ。」

「そんなら、証拠にお金を見せてよ、おばちゃん。」

「これだけみんな買つてあげるわ。あるだけ鹽の金魚をすくい出して持つてお帰りになるがいいわ。ほしけりや金魚屋のおじいちゃんも売つてもいいわよ、ふふ、……こんなにちはお久しく、おじいちゃま。」

「おう、三歳っ子、あれがおめえのだんない、うまくやつたな、よばよばは直ぐかたがつくから、しこたま貰つとくがいいぜ。」

「何言つてんの、だんなじゃなくてセンセイだわ、締め殺したつて死ぬ方じゃないわよ、心臓には鉄屑が一杯つまつていらつしやるから、あんたなんぞの手に負えはしない。」

「それじゃ機関車じゃねえか。」

「旧式の機関車なもんだから、森林でも山でも、咬み倒して走つてゆくわよ。」

「おめえは一たい、あの方の何なんだ、わかつた、おめかけさんだな。」

「あたい、あの方のこれなのよ、お妻さんなんかじゃないわ、も一遍、頬ぺ叩いて見せてあげるわ、ね、ちつとも、お慍りにならないでしょう、あたいの言うこと何だつて聞いてくれるのよ、いまにお池と魚洞をつくつてくださるお約束なの、おじいちゃま、お金がほしかったら、こんど来る時にうんと金魚持つていらつしやい、お池に放すんだから、どれだけ居たつて足りることはないわ。」

「おめえは偉い金魚に、何時の間に早変りしたんだ。」

「対手次第でどんなにでも、かわれば変ることが出来るものよ、多少バカでもね。」

「いつでも鏡台にむかつてべそ搔いていたからな、お客はつ

かないしからだは弱いしね。だが、三歳っ子、こんだ当てたな、あのじじい、したたかな顔をしているが、商売は一体何だ。」

「知らない。」

「知らないことあるもんか、こそつとおらにだけ言えよ。」

「知らないったら知らないわよ、知っていたって金魚屋さんなんか、あの人のこと言うもんですか。」

「言えない商売ならどろぼうか、騙りの類だろう、だが、どろぼうが石堀の中に住むことは、ねえからな。ひよつとすると凶面引きかな。なんとか言ってくれよ。」

「知らない、あたい、あの方のこと言わないってお約束がしてあんだから、いくら、おじいちゃまだって言えないわ、誰にだっていうもんか。おうい、おじさま、そろそろお出掛けのお時間よ、早くお髭を剃ってお湯にはいつて、ご用意なさらないければ、時間に遅れたら大変なことになるわよ。」

「憂鬱だな、講演というものはもう三日前から、食慾がなくなつて了うし、胸は酸っぱくなるし、元氣までなくなる、……」

「だってこの間からお書きになっていた原稿を程よく、時間をお置きになってろうどくなさればいいのよ、さあ、お髭をお剃りになつて。」

「きみは来てはだめだよ。」

「だってあたいがいなかったら、おじさまはびくびくして講演出来ないじゃないの。あたい、うしろに隠れていて、おしりを抓つておあげするわ。」

「だからお節介はやめてくれと言うんだ。一人なら吃りなが

らでも喋れるが、きみがいると気が散るんだ、頼む、きょうは来ないでくれ。」

「なんて悲壮なお顔なさるわね、じゃ、行かないわよ。」

「慍るなよ、おじさんは一人だと、さばさばして何でもお喋りが出来るんだ。」

「じゃ、まいりません、あんしんして行っていच्छい。階段は迂るから気をつけてね。それから、パイプをわすれな

いで持つて帰っていच्छい。」

「じゃ行つて来る。」
「^{テーブル}卓の上にコップと水を頼んで置かなくちゃね。お話に詰つたら、おひやをあがるがいいわ。たすかるわよ。」

「金魚じゃあるまいし、水なんかいらないよ、水ばかり飲んで降壇したらどうなるんだ。水を飲み演壇に立つようなものだ。」

「それなら、なお拍手喝采だわ、コップの水を飲んで、それきりで降壇するエンゼツもあつていいじゃないの。」

「あ、困った。」

「くるまが来たわよ、あら、美しい婦人記者がお迎えなのよ。ぴちぴちしていて、くるまと同じ色の靴はいていच्छいやる。」

「きょうは美人も眼にはいらぬ。」

「なんて顔なさるの、ほら、お帽子よ。」

「じゃ、行つて来る、来ないでくれよ。」

「じゃ、行つてらच्छい。おじさま、顔、もう一遍見せて、それでいいわ、もう元氣が出て来て、かくごをしたお顔色になつているわ。」

「あの、お見受けしたところ、どこか、おからだがお悪いんじゃないかもしれませんか。」

「は、少し何だかきゆうに。」

「たいへんお呼吸が苦しそうですが、お水でも、おあがりになりましたら？」

「水なんかあなた、会場ではとても。」

「お水ならあたいたい、いいえ、わたくし、持っていますから、水筒の口からじかにおあがりくださいまし、さあ、どうぞ。」

「まあ、これは、恐れいります。」

「どうぞ、ぐっと、……」

「は、」

「もっと召しあがって、あ、おらくになって、お顔の色が出て来ましたわ。ほらね、呼吸づかいがちゃんと、平均して来たじゃないませんか。」

「は、どきどきするのが停ってまいりました。何とも、お礼のもうしようもございません。」

「もう、ちょっと召しあがれ。」

「あ、おいしい。もう、おさすり下さらなくても、結構でございます。どうぞ、お手をおろしてくださいまし。」

「お呼吸の苦しい間、お背中が強張^{こわば}っていましたけれど、あ、そう、わたくしもお水いただいて置きましょう。お廊下に出てお憩^{やす}みになったら？ 上山さんの講演も終わりましたし。」

「では、ごめいわくついでに、ご一緒にしていただきます。」

「このクッションには、よりかかりがあつてよございます。」

「もうすっかり楽になりました。わたくし心臓が悪いものですから、会場に参つてからも気をつけていたんですけれど、

ふいに、前の方が暗くなってしまいました。」

「あなたが俯^{うつむ}向いていらつしても、お呼吸のはあはあいうのが聴えて来るんですもの、驚いちゃってどうしようかと、ひとりで、うろたえてしまったんです。」

「あの、へんなことお聴きするようですけれど、どうしてお水をあんなに沢山お持ちに、なつていらつしたんでしょうか。」

「ええ、少し訳がございまして、……」

「あら、ごめんあそばせ、失礼なこともうし上げまして、あなたがそんなにお若いのにご要心深いと、ついそう思ったものですから。」

「わたくしは何時もお水がほしい性分なものですから、水筒をはなしたことが、まだ一度もございません。」

「お井戸の水でございますね。」

「よくござんじでいらつしやいますこと。それより今日は誰方のご講演をお聴きにいらつしたんですか、まだ、ご講演がある筈なんです。」

「わたくし上山さんのご講演をお聴きして、もう帰ろうと支度しかかつていて、つい、めまいがしたものですから。」

「上山さんをごぞんじでいらつしやいますか。」

「上山さんに書き物を見ていただいたことがあるんです。十五年も前のことですが、滅多^{めった}にご講演なぞなさらない方なものですから、お目にかかりたくても機会がなかったのですが、新聞でお名前を見て今日は早くから参つていたのが、からだに障^さったのかも知れません。」

「まあ、おじさまと十五年も前に、お会いになつていらつし

ったんですか。」

「おじさまって仰有ると、それは上山さんのことですか、水筒に上山と書いてあったものですか、はっとしたのですが、上山さんのご親戚の方なんですか。」

「ええ、親戚の、そうね、孫のような者なんですけれど、お身のまわりの事も見ておあげしている者です、どう言ったら巧くわたくしの立場がいい現わせるか、いいにくいんですけれど。」

「でも、おじさまってお呼びになっっていらっしやいますから、きつと、同じお家にいらっしやるんでしょう。」

「え、きょうのご講演は聴きに来ちゃいけないって、厳しく申しつけられていたんですけれど、家にいるのがたまんなくて参りましたの、あたいがいなくては、上山は何も出来ないんですもの。」

「まあ、あたいつてお可愛らしいことを仰有る。」

「もう、言っちゃったから言うけど、あたい、おじさまが失言したりなんかしないかと、びくびくして聴いていました。そしたら巧くお喋りになれてほっとしちゃったの。そしたらこんどは、あなたのおからだが悪くなつて、それが会場総立ちになったらおじさまが可哀そうだから、お水をさし上げたのよ、あたい、あんなに慌てたことがないんですもの。」

「あなたはお幾つにおなりなの。」

「あたい、幾つかしら、幾つだと言ったら適当なのかわかんないけれど、十七くらいになるでしょうか。」

「それで上山さんはあなたをお可愛がりになっっていらっしやるんですか、たとえば、おみやげとか、お買物とか、ご飯も、

ご一しょにあがっっていらっしやいますか。」

「いいえ、ご飯は別ですけれど、あたいの食べる物は、ふつうの人とはちがいますもの。」

「どういうふうに、お違いになるんですか。」

「そんな事ちよつと簡単にはいえないわ、お食事はちがっていますけれど、夜もご一しょに寝ることもあるし、……」

「まあ、ご一緒にお寝みになるんですか、そんなことをあなたは平気でおっしやいますけれど、ご一緒ということは、一つのお床で上山さんとお寝みになることなのよ、勘違いをしていらっしやるんじゃない、……」

「いいえ、一つのお床なのよ、あたい、おじさまのむねや、お背中の上に乗って遊ぶこともあるし、……」

「遊ぶんですって。」

「ええ、撥ったり飛んだり跳ねたりするわ、おじさまは眼をつぶっていらっしやいますだけけど、あたい、そのお眼め眼をむりに開けたり、それからお眼め眼の上からだを据えていたりしていますと、おじさまは、とても、眼が冷えてお喜びになります。」

「あら、そんな事までおっしやって、あなたは大胆で無邪気でいままであなたみたいな方に、わたくしお会いしたこと一度もないわ、も一度おききたいんですけれど、余り失礼なことでもわたくし自身うかがうことも、羞かしいくらいなんですけれど。」

「どんなことか知ら、何でもお答え出来るわ、あたい、おばさまも好きになっちゃった、誰でも好きになっって困るんですけれど。」

「おばさまといって下さると、嬉しくなるわ、あのね、お慥りにならないで聞いててね、あなたは上山さんと関係がおありになるの、夜もご一しよだとおっしゃるし、……」

「関係ってどんなことですか、あたい、関係ということ初めて聞いたわ。」

「おじさまはあなたとお寝みになってから、どんな事をなさいますの、こんなふうにものを言うの、ごめんなさいね、だって、こう言うより問い方がないんですもの、たとえばあなたをお抱きになったりなさいます?」

「いいえ、仰向きにねていらっしゃるだけなの、抱いていただいたことないわ、ただ、あたいの方でふざけるだけなの。」

「だってそんな事ある筈ないと思うんですけれど、まあ、あなただって方、女でもないみたいに、ちっとも羞かしがらないで、何でもふつうの事のようにおっしゃるわね、強く抱いたら潰れてしまうなんて、」

「潰れてしまうわ、あたい、ちいちゃいんですもの。」

「そんなに大きくなっていらっしゃるじゃないの、おっぱいもお棚みたいだし、腕もまん円くてあぶらで冷たいし、血色もいいし、それでおじさまが何もなさらないんですか。」

「あたい、おじさまのこもりうたかも知れないわ、ふうと来て、ふうと吹かれて行くだけなんですもの。でも、おじさまはたんと愉しいことを知っていながら、あたいに、してくださらない事になるわね、ずるいわ、あたい、おじさまに言うてやるわ、愉しいことを抜きにしちゃ厭だって。」

「そんな事おっしゃってはだめ、いままでどおりのおじさまで沢山じゃないんですか。わたくし詰らない事をお話しまし

たけれど。」

「あたい、これ以上愉しいことある筈ないと、何時もそう思っていたんですもの。」

「わたくしね、先刻いただいたお水をあんなに沢山持つていらっしゃる訳が、お聞きしたいんですけれど、どう考えて見ても判らないの。」

「あれは言えない、」

「なぜお笑いになります、だって水筒に一杯お水を持って講演会にいらっしゃる訳は、とても判らないわ。誰にでも判りっこないわ。」

「そうね、おばさまにはとても、判りっこないわ、誰も判る人ないわ、誰にも知られたくないあたいのヒミツなんだもん、おばさまにもいうこと出来ないのよ、あたいのお口に手をかけて吐かそうとなすっても、頑として言わないわ、おじさまだけがその訳知っていらっしゃいますけれど。」

「上山さんは何とおっしゃっていらっしゃるの。」

「何時もお水をわすれるなど仰有るわ、あたいの何も彼も、みんな知っていらっしゃるんだもの。」

「おからだに必要なんですか。」

「そうなの、水がなくなると、あたいの眼が見えなくなるかも知れないんですもの。それよりか、一たい、おばさまは何故十五年もおじさまに、お逢いにならなかつたの、あたい、その訳が聞きたいんです。おばさま、その訳を詳しくお話しして頂戴、おばさまの顔は美しいけれど余りに白っぽいし、お背中だって先刻さすったときに感じたんだけど、まるで、おさかなみたいに冷え切っていたわ。」

「わたくしあの時、ずっと血の引いてゆくぐあいが、すぐ判っていたぐらいですもの、冷えるの当り前のことだわ。」

「いいえ、その事をお聞きしているのじゃないわ。なぜ、おじさまにお逢いにならなかったかという事なのよ、ね、それをお話して。」

「あなたにお水が必要でその訳が仰有れないように、わたくしがお逢いできなかったことも、いま直ぐにはお話出来ないわ、」

「それもヒミツなのね、」

「ええ、そうよ、ヒミツなのよ。」

「おばさまはあたいを好き。」

「え、もう、今日会場にはいると、すぐあなたのおそばに坐るように、頭がふいに報らせたの。」

「頭が報らせた？」

「そうよ、あの小さいお方のところに往け、そしておあいしろと言われたわ。」

「誰^{どなた}方に、誰方がそう言ったの。」

「頭がそう作りあげたのよ、その時、あなたも扉の方にチラと眼を向けて、ちゃんと知っていらつしたふうじゃないの。」

「あたい、あの扉から誰かが来る筈だと、会場にはいると、すぐ、ずっと、思い続けていたわ、一ぺんも会ったことのない人だが、会えばすぐ打ち融けてお話の出来る方で、お話しなければならぬことが沢山たまっている方だと思っていたの。だから、お席をとってお坐りになれるようにしていたのよ。」

「あなたは嬉しそうににこにこしてたわね。」

「あたい、おじさまがバカを言わないかと、それが可笑しくて。あなたはとうしてご講演中うつむいてばかりいらつしたの。まるで聴いていらつしやらないふうだったわ。」

「お顔を見るのが羞かしかったし、見られまいと懸命にうつむいていたの、そして遂に一度も見なかったわ。」

「何故、お顔をお見せにならなかったんです。」

「あの方にはお逢い出来ない訳がありますのよ。」

「どうして。」

「どうしても、」

「あたい、おじさまにあなたにお目に懸ったって、きょう帰ったらお話するわ、まあ、そんなにお顔の色を変えちゃって。お話するのが悪いんですか。」

「あなたに何も言つて下さるなど言つたって、とても、だまつてはいらつしやらないわね、けれど、おじさまはわたくしにあなたが会つたと仰有つても、そんなばかな事があるものかと、信じてくだらないわよ。」

「何故か知ら、だつてこうしてお会いしているのに？ おばさま、お手々^{てて}出して、こんなに確かにぎっているのに、嘘なんかじゃないでしょう、おばさま、キスしましょう。」

「まあ、あなたって何てコドモさんなんでしょう、でも、キスすること知っているわね。」

「おじさまと何時もしているんだもの、あたい、の、つめたいでしょ。」

「ええ、とても。」

「あら、あら、おばさま、皆さんが出て来たわ、講演が終つちやつたのよ、あたい、こうしてはいられないわよ、おばさ

ま、一緒におじさまの処に行きましょう。きっと吃驚なさるわよ、あら、そんなお顔をお変えになって一体何処にいらっしゃるの。」

「わたくし、これで失礼します。」

「ね、おじさまにお逢いになってよ、あたい、うまく取りなしておあげするから、一緒にいらっしゃい。」

「若しわたくしのこと仰有るようだったら、わすれないでいますと、そう仰有ってね、お仕合せのようになってね。」

「おばさま、往っちゃだめよ、だめよ、往っちゃ。」

「では、おわかれするわ、おりこうさん。」

「おばさま、お手手出して。」

「そうしてられないんですよ、では、あなた、おじさまを好く見てあげてね。」

「よくして上げるわ、往っちゃいけないというのに。」

「じゃね。」

「おばさま、おばさま。」

「……………」

「あ、往っちゃった、せっかく、大事なお友達が出来たのに往っちゃったい、おばさまのばか、戻って来て、おばさま、……」

「おじさま、あたいよ。驚いたでしょう、ちゃんと来ていたのよ。」

「吃驚するじゃないか、ちんぴら、どうして来たんだ。」

「ここ開けてよ、ずっと、ご講演を聴いていたのよ、飛んではない事、おっしゃるかと思って心配しちゃった。ここ、開

けてよ。」

「お這入り、あんなに來ちゃいけないって言っていたのに、困った奴だ。」

「だってお家にひとりでいるのが、胸がやきもきして、とても、たまんなかったもん、ご講演よく聴えたわよ。」

「でも、よく、ひとりでくるまを見附けて乗ったね。」

「駆けずり廻ってやっと見附けたのよ、このくるま新聞社のでしょう。」

「送ってくれるんだ、家まで。」

「あたい、赤い旗の立っているくるまに乗るの初めてだわ、とても、勇ましいわね。」

「水を持っているね、水筒なんか提げて要心深くていい。」

「おじさま、お話したいことが沢山あるのよ、此方お向きになって。」

「むずかしい顔をして何を言い出すんだね、くたびれているから、少時、何も言わないでくれ。」

「大変な事があったのよ、くたびれたでは済まないわよ、きょうね、あたいの横に坐っている方がいてね、顔色があお白いんだか白いんだか判らないくらい、乳のような色をしている方がいらしかったの、うつ向いて講演を聴いていらっしゃるのよ、おじさまに顔を見られはしないかと、そればかり気にしているような方なのよ。」

「演壇からは人の顔なんか、暗くて見えはしないよ。」

「そのうちその方がきゅうに酷そうに、呼吸困難みたいになっちゃって、あたい、吃驚して水をあげたのよ、そしたら落ち着いて、ふうと呼吸もふだんのままになって来たのよ。」

「よく気がついたな、心臓が悪い人らしいね。」

「よくわかりね、おじさまは。」

「何だ、人の顔をじっと見詰めたりなんかして、へんな子だ。」

「その方をお廊下の方におさそいして、憩^{やす}ませておあげしたの、もう、おじさまのお話が済んだ後だったから、クッションの上で永い間お話したわ、水のようにお廊下に人氣がなくて、その方の顔の色があたいの五体にしみ亘るほど、へんに冷たかった、おじさま、その方は一体誰だと思いいになる、……」

「さあ、誰だかね。」

「おじさま、言つて上げましょうか。」

「妙な顔をするじゃないか、知っている人なら早く言いたまえ。」

「吃驚しないでよ、田村ゆり子という方なのよ、とても鼻すじのきれいな方、あら、おじさまの眼の中がきゅうに動くのが停^とっちゃった。」

「田村ゆり子」

「そうなのよ、田村ゆり子っていう方なのよ、どう、吃驚したでしょう。」

「自分から田村ゆり子と名を言ったの、」

「あたいがお訊きしたからよ、そしたら水筒の水をおあげしたときに、上山って書いてあったのをお読みになったらしいわ、きゅうに眼をあたいにじっとそそいで、こう、おっしゃったわ。あなたは上山さんの誰方だとおいいになったから、あたい、おじさんの事何でも見てあげている者だといったら、お幾つとお聞きになり、あたい、十七歳だとおこたえしたわ。」

そしたらあたいの顔をまたじっと見直して、あたいのことがみんな解っているふうだったわ、どうかすると、おじさま、あの方、あたいがおじさまのどういう者だかも、ちゃんと解っているらしかったわ。」

「それは解るまい、いや、解っているかも知れないが、確かに田村ゆり子といったね、どう考えても、そんな女がいまごろ現われるなんてことは、ありえないことだ、本当のことを言おうか、その田村ゆり子という女は、とうに死んでいる女だ、死んでいる人間があらわれることは絶対にない。」

「まあ、死んでいる方なの。」

「その名前の女なら死んでいる、きみの話した人はその人ではないんだ、怖い、」

「怖い。」

「思い当ることが何かあるの、こまかく言つてごらん。」

「たとえば余りに綺麗で、何も彼も知つていらつして、空とぼけていらつしやるふうだったわ、あたい、しじゅう、ぞくぞく嬉しいような悲しいみたいな、それで氣味が悪いような時々いやあな氣がしていたわ、死んでいる人だといえぱそんな氣もしないではないのですが、不思議なことがあったわ、」

「どんなことなのだ。」

「あたい、氣のせい、おばさまの手をにぎって見たくて、きゅっと、握っちゃつたの、あら、いつの間にかあたい、その方をおばさまと呼ぶようになったの、わずかの間にそういうふうになつていたのね、その時にね、おばさまの左の手に一つの傷あとを見つけたの、金属の擦過傷のよ

うだったので、これ、どうなさいましたと言ったら、すぐ手をお隠しになったわ、あたい、そこに腕時計がふだんから嵌められていた痕が、あかくのこっているのを眼にいれたの。」

「腕時計のあとだって、」

「それが時計の形とくさりの痕が、まるでその儘でのこっていたのよ、だから、あたい、お時計きようはあそばさないといいたら、こわれているものですからと仰有っていたわ、言葉がともきれいな方なのね。その時のお顔の色つたらとても悪かった。」

「その傷というのは酷くなっていたの。」

「そうよ、残酷に時計を手頸からもぎ取った瞬間の傷あとだったらしいわ、あたい、その訳を聞こうとしたけれど、仰有らなかつた、きつと、おじさまがお奪りになったのでしょうと言うと、上山さんじゃないと仰有ったわ、その他のことは何も仰有らなかつた。まあ、おじさま、何ていやなお顔をなさるの、おじさま、おじさま、慄え出しちゃった、……」

「そんな人が物をいう筈がない、だが、その時計の話はほんとのことなんだ、明け方に心臓マヒで倒れてから、五時間誰もその部屋にはいった人間がいらないんだ、掃除夫が鍵のかかっていないドアから何気なくすかして見ると、田村ゆり子は仰向けになって畳の上で死んでいた、その時にまだ時計はうごいていたのさ。」

「だっておじさまは何故そんなお顔をなさるの、また、額から汗がにじんで来たわ、ひよっとするとあぶらかも知れないわ。」

「おじさんの驚いたのは、その女ときみとが話をしたという

ことに、驚いているんだ、きみはその女をまるで知らないくせに、いま言うことがみんな本当のことなのだ、その実際のことにはやられているのだ。」

「お背中をさすっておあげした時、なりの高い方だということが、背中のすじの長いことですぐ判ったわ。」

「どういう声をしていたんだ、声のことを言っただらん。」

「柔らかくて聞き返す必要のない透った声だったわ、あたい、あなたにお目にかかったことをおじさまに、みんなお話するというと、お停めしてもきつと仰有っておしまいになるから、おとめしないと仰有っていたわ。」

「そして何か言伝がなかつたか。」

「あたいにね、おじさまを好く見てあげてと言っただけだわ、きようは十五年振りにお目にかかれたと、それきりお別れしちゃった。いくら呼んでみても振り返りもしないで、出口の方にお往きになったのよ。」

「たしかにその人は田村ゆり子と言ったんだね、きみが介抱してあげた人がぐうぜんに、そんな名前の人だった訳じゃないね、時計のことも、ぐうぜんに似た話だとするより、おじさんの考えようがないんだが。」

「その女の人はおじさまの一体何なのよ。それから聞かないと話が判らないわ。」

「それは田村さんの書いた物をおじさんが読んで上げていたんだ、そうだな、五六年も間を置いて続けているうち、突然、書き物の原稿を送って来なくなっただ。すると或る日警察の人が来てね、田村ゆり子が昨夜急死したと言って、おじさんが署に連行されて調べられたんだ、おじさんは家にも来て

顔は知っているが、アパートの部屋なぞにはまるで一度も行ったことがない、だから死因も何も判っていないのだ、警察ではおじさんからの原稿を廻送した封筒から住所が判ったらしく、そんな封筒までちゃんと取ってあったそうだが。」

「おじさまは女だとお節介ばかりなさるからよ、警察からじや、いやあね。きつとお時計が失くなっていたからでしょう。」

「時計と外に洋服なぞも失くなっていたらしく、牛乳屋さんが配達に廻ったときに、ドアが開け放しだったそうだが、犯人は出なかつたらしい。」

「おじさまの嫌疑は？」

「事件と関係がないことは直ぐ判ったさ、だが、その急死と同時におじさんは永い間見ていた原稿の内容から、田村さんという一人の女が、役にも立たない原稿を書きながら死んだということが、小説風な情景で頭にのこったのだ。」

「原稿はお上手だったの。」

「ふつうの人と変ったところはない、寧ろ拙い方だったかも知れないね、ただ、飛び切った二三行くらいの面白いところが処々にあつたくらいだ、それは男の人と友達になると、すぐ此の人もだんだんに親しくなつて、言い寄つて来ないかと、それが見え透いて来ることが恐いと書いていたことだ、そしてその男が田村さんに口説いてくると、一遍に、避けてしまふという妙なくせのある文章の人だったのだ。」

「おじさまもきつと、引きつけられていたのでしょう。」

「田村さんの小説がそんなふうなので、何時も先を越されている気がしていたんだよ、あの人がいま頃出てくるなんて事はないさ。」

「でも、あたい、ちゃんと見たんだもん。」

「へんな事が重なるものだね、」

「おじさま、何処かでお憩みにならない、銀座に来たわよ、あたい、塩からい物がたべたいわ。」

「降りよう、バーに行こう。」

「お酒あがれないくせに、よくこの頃バーにいらつしやる。」

「彼処に坐っていると皆さんの酒氣が漂うて来て、頬が熱くなつて酔つたような氣がするんだ。」

「いらつしやいませ。」

「何か塩からいものを頂戴、それから、おじさまはなあに。」

「何でもいいよ、匂いをかぐだけだから。」

「あら、金魚がたくさんいるわね、みんな、あたらしい水をほしがつて、可哀想にあぶあぶしてひどそうだわ、あの、この金魚の水くさりかけていますから、可哀そうだから取りかえて上げて。」

「毎日お店に出てくるとすぐ、お水かえるんですけれど、きようはつい忘れまして。」

「それからお塩をひとつまみ入れてあげて。」

「お塩がいいんですか。」

「くたびれた金魚にはほんのちよつぴり、お塩がいるのよ。おうい、ちびちゃん、お塩氣がほしいんでしよう、そう、そうなのね。おじさま、ちゃんともう判つていて、そばに寄つて来たでしよう、なに言っているのか幾らおじさまでも、このヒミツは判りっこないでしょう、お姉さまは何処からどうしていらしたつて、そんな恰好がどうしたら出来たのと、皆、眼に一杯ふしぎな色を現わして、言っているのよ、口を

開けて瞬きもしないであたいを見ているでしょう、あたいも見てやる、」

「きみ、あまり変なことという、皆がへんな顔をするよ、身元を洗われるよ。」

「あ、お水が来たわ、そのお水ここに頂戴、あたいが入れてあげるから、みんなおつむをならべるのよ、したしたと、：どう、とても、さっぱりと快い気持でしょう、したしたというこの音たまらないわね、みんな鱗の色も悪いし痩せているのね、硬い麩ばかり食べているからよ、ほら、好きなお塩よ、それをぐつと飲んで胃ぶくろがひりついたぐあいが、とても、たまらないでしょう、みてご覧、ほら、ほら、眼につやが出て来たし、紅鱗たちまち榮えて来たわ。」

「いい加減にしないか。あの方、まるで金魚のご親戚みたいにか言っているじゃないか。よほど、金魚が好きと見えるって言っているじゃないか。」

「人間にあたいの化けの皮がわかるもんですか、おじさま、ひさしぶりで不倖なお友達の様子を見て、おじさまがあたいを大事にしてくださいが、どんな仕合せだか判ってきたわ、おじさまに、お礼をいうわ。」

「だからね、金魚とお話するの止めるんだよ、皆さん、変な顔をしているじゃないか。」

「大丈夫、ちび達がはなれないんですもの、あら、白い黴かびのようなおできが出来ている子もいるわ、すぐ取らなくちゃ大変なことになる、……済みませんがお茶碗一つ貸して頂戴、この子をべつにしてかびを取らなくちゃ、じっとしていて、痛いのを我慢しているのよ、すぐ済むわよ、ほら、剥けたわ、

このあとに塩をぬつてと、さあ、もう遊んでもいいわよ、明日はさっぱりするから。」

「お嬢様は金魚屋さんみたいですわね、どなたがいらっしゃっても、金魚のことなんか些ちつとも見てくださらないのに、ご親切にして頂いて済みません、皆、お嬢様の方を見上げていますわ、言葉が解るような顔をしているんですもの。」

「ええ、あたいが好きだから、金魚の方でもわかるらしいのね、おじさま、金魚がおじさまのことをあなたの誰だと訊ねているわよ、だからあたい、この人はあたいのいい人だと言つてやったわ、そしたら皆がうふふ、……って笑っているわよ、あのこえ、あんな賑やかなの聴えて、おじさま。」

「聴えるもんか、みんな金魚って同じ顔しているじゃないか。」
「でも、顔の一つずつがみんな異っているわよ、親子姉妹別々な顔をしているわ、よく、くらべて見ると判るわよ。あたね、お願いがあるんですけれど、きつと聴いていただけね。」

「何なの、」

「この金魚ただけじゃないかしら、此処に置くの可哀想だから連れてかえりたいの、みんな不仕合せなんだもの、この儘、見て戻ったら、あたい、気になって今夜はとも睡れそうもないわ。」

「別の金魚を買って貰うことにしたら、きつとくれるよ、気になるなら買ってあげよう、訳のないことだ。」

「有難う、おじさま、五尾で百円出せばいいわよ、たんと出す必要ないわ、あたい、値段みんな知ってたんだから。」

「では百円出すことにしよう。そろそろ帰ろうね。」

「ええ……あら、誰でしょう、誰かが扉の間から此方を覗いて見ているわ。女給さん、誰方が、いらっしやっているらしいわよ。」

「あの人、蠟ろうけつ染ぞめの物を売っている方なんです。おいりようだったら、そう言いましょうか、何時もは中に這入はいっていらっしやるんだけど、今日はどうしたんでしょう、お這入りにならないわ、……」

「あら、ちょっと俟まちってておじさま、きよう会場にいらっした方だわ、違ちがいじゃないわ、横顔がおばさまそっくりだもの。おばさま、おばさまじゃないの、あら、扉から顔を外しちやった、おじさま、あたい、ちょっと追っかけて行ってみるわ。」

「何言っているんだ。」

「おばさま、田村のおばさま、あたいよ、昼間、お水をあげたあたいよ、ちょっと俟まちってて、其処の小路は行き停まりなのよ、おじさまも一緒に、先刻からおばさまのお話をしていたところなのよ、ねえ、引き返して頂戴。」

「きみ、人ちがいだよ、蠟ろうけつ染ぞめなんておかしいじゃないか。」

「おじさま、表に出ていらっしやい、ほら、此方をお向きになった、おばさまだ、あの方よ、あの方なのよ、行き停まりなものだから、まごまごしていらっしやる。ね、おじさま、堀の処を見るのよ、真正面で少しの惑いもなく立っていらっしやるじゃないの、見てよ、見てよ。」

「見た、たしかに田村ゆり子だ、幾らばやけたって嘘のない顔だ。」

「おじさま、何か仰有い、おじさまの仰有のを待っていらっしやるふうだわ、あ、お口が少しずつあいた、お微笑いに

なった、おじさま、腰をかがめて遂に挨拶なすったじゃないの、おじさまもご挨拶をなさい、早くよ、早くするのよ、笑ってお上げるのよ、なんて臆病なおじさまなことか、やっとしたわ。おばさまの嬉しそうな顔ったらないわ、ふだん、あんなお顔で微笑っていらっしやったの、凄すごい美しい顔だナ。」

「きみ、呼んで見たまえ。」

「おじさまが呼んで上げるのよ、あら、おばさま、其処の煉瓦れんが堀の穴は抜けられないわよ、おからだに傷がきます、あたい、其処にいま行きますから。」

「行つてつかまえてくれ。」

「死んだってばなさない心算つもりで、お手々にぶら下がるわ、おじさまもいらっしやい。」

「うむ。」

「おばさま、其処の穴は欠け石でがじがじして危あやいしたら、抜けたって向う側はどろどろ川なのよ、墜おつこつたら死しんじまう。」

「くぐったね、早いね。」

「あ、穴の外に潜ひそって出ちゃった、あれ、水の音じゃない、ごぼんといったのは？」

「そう、水の音おと響とかな。」

「おじさま、また汗とあぶらが先刻みたいに、額おでこににじみ出たわよ、」

「黙もくっている、何か聴える。」

「おばさまの声だわね、うなっているらしいやうね、水の中からかしら、それとも、……」

三、日はみじかく

「あたいね、先刻から考えていたんだけど、こんな立派な入歯をお嵌れになっても、おじさまは、お年だから間もなく死ぬでしょう。」

「そりゃ死ぬね、黄金の入歯だって何にもなりはしないよ、けど、これで何でも噛めるから至極安楽だね。」

「歯齧の作りがみんな黄金でしょう、一体、どれだけ目方があるか知ら。」

「何^{なんもんめ}歹あるものかな、何故、そんな事を聞き出すんだ、極り悪そうにしてさ。」

「おじさまが死んじやったら、誰が一等先に入歯を取っちゃうか知ら。」

「誰だか判らないな、或いはきみかな、きみは、黄金^{キン}をほしがっているんじゃないか。」

「あ、当っちゃった、あたい、おじさまがお亡くなりになったら、それ、誰よりも先に戴くわよ、それで耳輪と指環とをこさえるの、いまからお約束して置いてね、きつと、やると仰有って置いてよ。」

「やってもいいけれど、口の中に指を入れて入歯を外すときに、噛み附いて見せるから、それが怖くなかったら取るんだね。」

「ほんと、噛み附く気なの、だってお約束だからいいじゃないの。」

「その時の気次第なんだよ、腹が立っていたら、指先をが

にっとなんでやる。」

「死んでいる人が噛み附くことなんか、ないじゃないの。」

「口だけ生きのこってやる。」

「ふふ、したらあたい、先におじさまの口の中に筆の穂をいれて、まだ、生きていらっしやるかどうか、試して見てからにするわ、擦ったがらなかったら、直ぐ外すわ。」

「僕は擦ったくても、じつと我慢していて、指先が口の中にはいるのを待ちうけている。」

「いやよ、そんな意地悪するなんて、くださるものなら、あつさりとくださるものよ。」

「やるよ、死んでまで噛みつきはしない、ただ、そういつて見たかっただけだ。」

「先刻からのお話をみんな聞いていて、ボックスにいる方、笑っていらっしってよ、でも、あの方、おじさまの顔とあたいの顔とを見くらべていて、どんな間柄だかを読んでいるみたいね、あの眼どうでしょう、些^ちつとも、智恵のまじっていない眼の美しさだね。」

「利いたふうなことをいうね、ああいう眼をしている人は、も一つ奥の方に別の眼を持っていて、それが何でも見とけているかわりに、表側の眼はいつも留守みたいに美しく見えるんだよ。」

「誰方かを俟^{まち}ってらっしやるのか知ら？」

「さあね、なかなか好い顔をしている。きみみたいに、やはりぽかんとしているけれど。」

「ご挨拶ね、あの方、あたい達が入って来ると、すぐ後からいらした方よ、あたいの顔ばかり見ていて、お話^{はなし}しかける

みたいように、にこにこしていらっしやるじゃないの。」

「金魚の化けの皮が判っているのかも知れないよ、珈琲は喫まずに水ばかり飲んでゐるからだ。」

「あたい、あの方と、お話して見ようかしら。」

「それより出がけに來たてがみを見せてくれ。」

「ほら、はい。これを読むといい氣持よ、このお嬢様のお母さまの小説なのよ、いいか悪いかは解らないから、読んでいただきたいって、お嬢様の手紙がはいっているのよ。」

「こういう場合もあるんだね。」

「お母さまがおじさまに直接に、手紙をお書きになるのが、きつと極りが悪いのね、あたい、こういうお嬢様になつてみたい。」

「もう一通のは？」

「おじさまのお家の前を往ったり來たりしているのは、実はわたくしなのでございます、時間は五時、もしおてすきでございましたらお会いくださいましと書いてあるわ、あたい、そのお時間に出て見て、いらっしつたらお通しするわ。構わないでしょう、五時なら何時もぼかんとしていらっしやるお時間だから。」

「お通ししてもいいよ、べつにぼかんとしている訳じゃない。」

「だって何もなさらないで、茫^{ぼう}乎としていらっしやるじゃないの。あたいね、昨日ふいに（海をわたる一尾の金魚）と、書いてみたのよ、とても大きい海のうえに金魚が一尾、反りかえって燃えながら渡ってゆく景色なのよ、そう考えてみたら、あたい堪らなく絵がかきたくなつちやつた、その反歌がふいに出了たわ、（山を登ってゆくあたい）というの。」

「ふむ、（海をわたる一尾の金魚）か、」

「聞えたのかしら、あの方、こんどは公式にわらい顔をしていらっしやるわよ、きつと、おじさまのお名前を知っている方なのよ、だから、あんしんして笑つて聞いているのよ。」

「きみの声大きいからなんだ、海をわたる一尾の金魚と聞いただけで、ぷつと笑いたくなるじゃないか。」

「金魚はおさかなの中でも、何時も燃えているようなおさかななのよ、からだの中まで真紅なのよ。」

「何故そんなにさかなのくせに、燃えなければならぬんだ。」

「燃えているから、おじさまに好かれてゐるんじゃないの。」

「そうか、」

「おじさまの胃潰瘍だつてあたいが入つて行つて、舐^なめて上げて、お薬をたんと塗つて上げたから、治つたのじゃないの、あたいの燃えた燐^{りん}があんな大きい胃袋の傷まで、お治ししてしまつたじゃないこと、なに言つてんの、そんな濃厚なお菓子まで召し上れるようになったのも、みな、あたいの燐^{りん}のせいなのよ。」

「それに病院のくすりの事も、わすれてはならないんだ。」

「病院の薬はただの物質だわよ、あたいの燐^{りん}と、鱗^{うろこ}のぬらぬらは、みんな生きてゐるぬらぬらなのよ、いちど胃腸にはいつていったら、あたい、めだかのように憔悴して出てくるの、おじさまにそれが判らないの。」

「判るよ、大きな声を出すと、ほら、またあの人^なが笑うじゃないか。」

「あの方、ここに呼んでみるわ、誰も來もしない人を俟^{まち}つたんで、どうかしている。」

「話しかけるのはよしなさい、なれあいの金魚みたいに、人間はすぐ友達になれるもんじゃない。」

「それもそうね、あたい達はすぐお友達になってしまいうけれど、人間はそうはかんたんには、お友達になれないわね。」

「きみ電話だよ、歯医者の治療時間なんだ。」

「じゃ、行ってまいります。此処にいてね、四十分くらいかかるけれど、きょうで、もうお終いだから我慢してね。」

「二人とも歯が悪くては困るね。なるほど、歯医者さんにはちゃんと、くちべにはおとして出掛けるなんて、感心だね。」

「でなかったら先生の手も、お道具も、くちべにで真赤になるじゃないの？ どう、とれましたか。」

「とれたよ、くちべにを取ると、まるでぼやけた顔になる。」

「くちべには女の灯台みたいに、あかあかと点っているものよ、消えたら、心までしょんぼりしてくるわ。じゃ往って来ます、あの、それから、あの方とあたいの留守中仲よしになったら、きかないわよ、うふ、あたいって妬きもちやきだわね。」

「大きな声を立てると聴えるよ、ほら、お金、」

「きょうのおきまりの煙草はもうあがっているから、あとは半本だってお喫みになっちゃいけないわ、煙草の箱、持ってゆくわよ。」

「一本だけ置いて行ってくれ。」

「だめ、つい一本が二本になるから、煙草を見たら、毒と思えということがあるわ、温和しく俟_{まち}っていらっしやい。じゃ、往って来ます。」

「あら、何時かのおばさま、ほら、講演会でお会いしたおばさま、あたい、ちらっと見て、すぐ判っちゃった。」

「お一人じゃないわね、ずいぶん、大きくおなりになったのね。」

「おじさまとご一しよなの、さあ、行きましよう、おじさま一人でお茶喫んでいらっしやるから、恰度_{ちやど}、いい時分だわ、何時か袋小路でお逃げになったでしょう、でも、きょうは放さないわよ。」

「きょうも急ぎの用事があるんで、こうしてはいられないの。だから、おじさまにはお会い出来ないわ、あなたとだけ、ちよっぴりお話するけど。」

「そんな事いわないで、いらっしつてよ、おじさまはきつとお喜びになります、妙ね、歯のお医者様の所にくると、きつと、お目に懸れるなんて、此間もそうだったわね。此間はどうしてあんなにお逃げになったの。」

「羞かしいからでしょう、こんな穢_{きた}い恰好しているから、お会いしたくないのよ。」

「ちよっとでもいいんですからいらっしつて、ここ、放さないわ。」

「おじさまは、あなたを可愛がって、くださる、……」

「ええ、そりやもう、何だつて言うこと聞いてくださるわよ、あたいのお臀_{おしり}だつて痒_{かゆ}いって言えば、搔_かいていただけのし。」

「まあ、お臀_{おしり}だつて、……」

「あたいがこんなに小ちゃいでしょう、だから子供だと思っていっぱしやるのよ、ほんと、あたい、子供なんかじゃないんですけれど、そして何だつて知っていますのよ、おばさ

まがお会いにならないわけも、ちゃんと判っているのよ。」

「では、その訳いって頂戴、どうしてお会い出来ないかということをね。」

「おばさまは、うれしいでしょう、だからお会いになれないのでしよう、ほら、へんなお顔になったわ、むかしのうれしいは、川のそばの柳の木の下にいたけれど、このごろは、ビルの中からも出ていらつしやるわね。」

「そのうれしいが物を言うのね、ほほ、でもあなただってうれしいじゃないこと。」

「あたい、生きてびんびんしています、何でも食べているし、決して逃げたりなんかいたしません。」

「いたしませんけれどね、人間に旨く化けていらつしやるじゃないこと。」

「ばれちゃったわね、おじさまが小説の中で化けて見せていらつしやるのよ、もとは、あたい、五百円しかない金魚なんです。それをおじさまが色々考えて息を吹きこんで下すっているの、だから、水さえあれば何処にでもお供が出来るんです、そしてあたい、甘ったれるだけ甘ったれていて、何時も、おじさまをとろとろにしているの、おじさまもそれが堪らなく好きらしいんです。」

「あの方は元からそういう方なのよ、めだか一尾水盤に入れて、いち日じゅう眺めていらつしやるような方なのね、何が面白いんだか判らないけど、飽きることもないらしい、そして突然顔をあげると街の中を歩くために、お家から飛び出しておしまいになる、……」

「そしておばさまとお逢いになる、おばさまは何時の間にか

死んでおしまいになった、そのお化けさんがおじさまの隙間を見つけて、所と時間を構わずにおはいりになる、……」

「そこで金魚のあなたに見附けられたということに、なるわね。でも、金魚を見附けたことはさすがにおじさまだけれど、金魚だって当節油断がならないわよ、あなたみたいな大胆な金魚もいるんだから。」

「あたいね、金魚だつてこと見破られたこと、はじめてなの、何時もそれが気になるんだけど、うれしいのおばさまに会ったら、かなわないわよ、けどね、おばさまがうれしいだということ、ほんとうの事か知ら？」

「触ってみるといいわ、冷たくないでしょう、ほらね、ここに手をいれてみたつて判るでしょう、こんなに、ほかほかと温かいでしょう。」

「ええ、おっぱいもあるし胸のふくらみもあるわ、やはりうれしいという事はうそなのね、あたいの金魚だということは本物だけれど、あ、おばさま、何時の間にか来ちゃった、此処なのよ、ほら、彼処に一人でぼつんとして坐つていらつしやるでしょう、あれもうれしいのおじさまかも知れないけど、ね、お這入りになって、ちょっとでもいいから、逢つておあげしてね、あら、先刻の人がそばに来て何か言っているわ。」

「じゃ、わたくしこれで。」

「だめだと言ったら、顔だけでも見せておあげしてよ。」

「わたくしの方で顔を見たから、それでいいのよ、おじさまはわたくしなんか見なくとも、見る人がたくさんおありになるんですから、じゃ、大事にしてあげてね。」

「また往っちゃった、何て脚の早い人なんだろう。おじさま、

ただいま、あら、ご免遊ばせ。」

「この方はね、先刻の手紙の方なんだ、きょう夕方いらっしやる筈だったが、丸ビルに用事があつていらっしつて偶然に出会わして、あとを蹤^つけて見えたんだそうだ、はは、後をつけたなんてこれは失礼。」

「でもおつけしたことは実際なんですもの、お目にかかれてとても嬉しゅうございますわ、齒^はの方、お治りになつたんですか。」

「ええ、もうすっかり、……」

「では、わたくし、これで失礼いたします。」

「そお、その内、宅の方にいらっしつて下さい。」

「ご免遊ばせ。」

「変な方ね、あたいが帰ってくると、碌^{ろく}に話もしないで往くなんて、あの方、おじさまがとうから知っている方なんですよ、それをあたいがまだ子供だと思つて、誤魔化していらつしたのね、ちゃんと判るわ、あたいのいない間にたんとお話したのでしょう。どうも、にこにことお話したそうな様子がおかしいと思つていたら、当っちゃった、何、お話していらつしたの。」

「きみの事さ。」

「あたいの何をお話していたの。」

「きみは僕のお嬢さまかと聞いたから、まあ、そんなものだと答えたんだ。そしたら、とても、お小さいけれどお利口さうだと言つていた。」

「妬きもちやきで困ると、仰有つたのでしょう。」

「それも言つて置いたよ、何でも油断のならない子だと、」

「あたいが金魚だなんて、仰有りはしなかったでしょうね。」

「それは言わなかった、言つても本当だとは思わないからだよ、金魚がそんなに巧く人間の形をととのえることは、予想以上のことなんだ。」

「で、一体、何のご用があつたの。」

「ちよつとした事だ、きみに言つたつて判りつこのない事だ。」

「たとえば？」

「きみには判らないことなんだよ。」

「あたいに判らないことなんか、一つもない筈よ、匿さないで言つて頂戴、あたいはじめあの方に好意を持っていたけれど、おじさまを奪^とりあげるような人は、悉^{ことごと}くみんな敵に廻すわ。」

「手敵しいな。」

「何か隠していることおありでしょう、きつと、隠している。」

「隠してなんかいるものか。」

「お顔の色が曖昧だわよ、気を付けて、誤魔化そうとしていらつしゃる。おじさまは、そんな時には、眼をあたいからそつとお外らしになるもの。」

「もう、此処を出ようじゃないか。」

「白状しなきゃ出ないわ、何時までも、坐つててやる。」

「じゃ、きみ一人いたまえ。僕はもう帰るから、給仕さん、勘定して下さい。」

「とうとう、白状しなかったわね、じゃ、あたしも、或る女の人に会つたこと言つてやらない。」

「誰に会つたの、廊下かね。」

「そんな事いう必要はないわ、おじさまが言わないのに、誰

がいうもんですか。」

「例の講演会であつた人の事だろう、きみの知っているのは彼の人の外には、凡そ人間のうちで誰も知っていない筈だ、どうだ当つたろう。」

「巧くお当てになつたわ、以心通じるものがあるのね、あの方、突然、廊下であたいを呼び止めたの、おじさまが来ている事、ちゃんと知っていらつしたわ。」

「僕には逢いたくないと言つていただろう。」

「あんまりお逢いしたい時には、逆に人間は逢いたくないというものらしいわ、それでいて、逢わないで帰ってゆくのは、なんとも言えないつらい気分があるらしいわ。」

「どんな顔色をしていた。」

「ええ、お顔ははれはれしていました、脚が早くて別れたとおもうと、もう、階段を降りていらつした。あたい、おじさまに釣られてみんな言つて了つたけど、まだ、おじさまは彼の人のことは些^ちとも話さないわね、一たい、どういふお話をしていらつしたの。」

「引つくるめていふと税金の話なんだ、あの女はこの頃、何でも働きつづめてやつと穴を抜け出したらしいの、穴つて抱えの家のことなんだがね、そしたら二年分の税金がどかつとやって来たというんだ、二年間で八万何千円という税金の告知書を目の前に置いて、眼がくらんだそうだ、それを抱え主がすぱつと払ってくれたんだ、べつに頼みもしないのにね、そこで、ほら、あの女はもとの商ばいに逆戻りさせられるということになるんだ。」

「税金がまた穴ん中にあの方を突き墜したことになるのね。」

「やつと匍^はい上つたところを、頭から無理やりに突き戻して了つたのね。」

「僕はそんな話を初めて聞いたが、税金を払うためにね、どれだけの人間が死ななくともいい命を死んだことか。」

「その税金の女の人とおじさまと、どんな関係があるというの。」

「関係はないんだけど話だけは聞いてくれというんだ、だから僕は話を聞いたのだ、あの女が抱え主から逃げ出したことを聞いたのだ。」

「払えないものね、ところでおじさまにその金払ってくれというの。」

「きょう会つたばかりの人が、そんなことをいふものか。」

「では、おじさまのお名前を知っているということだけで、それを言いたかつたというの。」

「そうだ、巧く言いあてたよ、わたくしはそれ以外に何もものぞまないと言つていたけれど、僕はこういつて見たのさ、では、あなたは或る特定のお金をさしあげれば、僕と食事をして一日遊んでくれますかと言つたら、ええ、と答えてくれた、では、あなたはいま僕の言つたような事をいふ相手に、みなそういうことを希み、またそれを平気でやりますかという、多分、それはそう致しますまいと答えていた、つまりその女は頭をつかう仕事が見たいというんだ、事務員とか經理の方とかの、頭のいる仕事を見附けたいと言いつづけていたのだ。」

「ところでおじさまはどう仰有つて、あの方のみちを開いてお上げになつたの。」

「僕は煙草のケースを進呈しただけだ。」

「ケースの中に、何時もの癖で、お金匿して持っていたらしたのでしょう。」

「うむ、まあね。」

「どうも煙草を取り出すふうもなさらないのに、ケースをよく持っていていらっしやると思っていたわ。女の人はそれを平気で受け取ったの。」

「貰ってもよい人から貰ったふうで、受け取っていたようだが、そしてわたくしどのように仰有ることをおつとめしたらいいのでしょうかと、真面目な顔附で言ったのだ、きみの言い分ではないけれど、^{えいち}叡智のない水みたいな眼で、僕をおだやかに見ていた。」

「で、おじさまは、何かお約束をなさいました。」

「僕はまた割りのよい仕事で金は取れることもあるんだから、その金で逃げられるだけ逃げなさい、いまのあなたには逃げるより外にみちはない、誰でも人間は逃げなければならなくなったら、姿を消すにかぎるといったら、わたくしもそれに限ると思いますと言った。で、ね、きみ、この女の人はきょう出掛けに僕の家の前をぶらぶらしていて、僕らが出かけたあとから、ずっと街まで蹤けて来ていたんだ。」

「おじさまは、底なしに女にあまいわね。」

「僕があまいんじゃないくて女の方があまいんだ、僕は断るところが知っているし、知らぬ他人に誰が金なぞやるものか、ところが人間の心にはずみが出来る瞬間には、実に綺麗に相手に応ずる気合があるもんなんだよ、つまり割りのよい仕事が続って来て失ったものを、別の人間が返してくれる場合だっ

てあるものだ、その予測というものが経験の中に生きているとしたら、生涯のある日にはそんな事の一遍くらいはたっているんだよ。それをしないのは、人間の価値をなくする吝な奴の仕業なんだ。」

「その後で女の方が、おじさまの後を^おうて来たらどうなさる。」

「趁えば趁うて来るで、いいじゃないか。」

「しまいに、ぐるぐる捲きに捲いて来るわよ。」

「その時はその時だ、捲かれてよかったらそのまま捲かれていてもよいし、悪かったら抜ければいい、^{じょうち}情痴の世界はその日ぐらしでいいもんだよ。」

「税金といえばあたいにも、税金がかかっているわ、金魚屋さんにいた時、おじいさんは税金をこまかく計算していてね、一尾ずつにみな少しずつかけていたわよ。」

「きみの五百円は高かった。税金が二割くらい、かかっていたんだね。」

「では、念のためにおじさまにお聞きいたしますけれど、たとえばあたいを売ってくれという人が現われて来たら、おじさまはお売りになるかしら。」

「売らないな、こんないい金魚はいないからな。」

「耳の穴のお掃除もするし、お使いにも行くし、何でもしているんですもの、売られてはたまらないわ、でも何万円とかいう大金を出す人がいたら、きつと、お売りになるでしょう。」

「何万円も出すばかりはいないし、第一、人間のまねをする金魚なんて何処を捜してもいないよ。」

「じゃ、あの女におあげになったケースの中にあつたお金ね、

あれだけ、あたいにも、くだらない。」

「あれは偶然にそうになったんだが、いま更めてそう切り出される、ごつんと悶えてくるね、こだわりが感じられてすらすらと出せない。」

「知らぬ人にお金をあげていて、あたいに、ぐずぐず言ってくださらないなんて、そんな法ないわ。」

「その内に出してよいものなら、出すことにする。」

「一たい、あのケースに幾ら入っていたの、あたい、それと同じくらいのお金戴きたいわ。」

「同じくらいなんて莫迦言いなさんな。」

「だから幾らあったのか、それを言つてよ。」

「よく覚えていないね、ねじこんで置いて置いたんだからね。」

「自分のお金の高が判らないなんて、そんな鈍間なおじさまじゃないでしょう、はっきり正直にいうものよ、指だけはいつていたんでしよう。」

「そんなにはいるもんか、二つ折りにしてあったんだから。」

「じゃ、これだけ？」

「それも当たらないよ、まあ、二本くらいが精々なんだ。」

「嘘おっしゃい、ほら、また曖昧な眼附をして、お外らしになった、ちゃんと、どんな時どんな顔色をなさるかという事、毎日研究しているから解るのよ、これだけは確かにあった、……」

「それほどはなかった。」

「うそつき、あんな女にお金やって、あたいにちよっぴりしかくれないなんて、ごま化そうとしたつてだめよ、同額でなきや承知しないから、正直にお出しになるがいいわ。」

「きょうは外に金は持っていない。」

「出掛けに社の方が持っていってしまったお金ある筈よ、まだ、状袋にはいったまんまのお金だわ、お出しにならなかったら、からだじゅう調べるわよ、怖いでしょう、さあ、いい子だから、お手々あげてお襦袢にポケットがついていて、そこにちゃんとお金はいつている筈よ、ほら、ご覧なさい、こんなにずっしりと状袋が重いくらいだわ、これ、みんな戴いとくわ、そしたらあの人にあげたお金のことなんか、もう言い出さなけから、いい気味ね、べそを掻いたみたいな顔をしているわ、あたい、これで先刻から詰っていたものが、ぐつと一ぺんに下がっちゃった。」

「夕食はきみが払うんだよ、」

「いいわ、奢つてあげるから何でも。」

「金魚でも女という名がつくと、なまずのような顔をする。」

「おじさまは懲らしめることの出来ない人間だから、うんと懲らしてあげるのよ、あたい、つねづね、なまずにもなって見たいし、ぬらぬらした鰻にもなって見たかったのよ、変ったお魚を見るとすぐその真似がして見たくなる、一生びかびかした金魚になり澄ましているのは、意気地がないし退屈で窮屈なんだもの。しまいに、くじらにでもなって、海のまん中でお昼寝してみたいわ。そしたらね、おじさまを背中によこんと乗つけてあげるわよ、泳げないおじさまはあたいの背中から、逃げ出すことが出来ないもの、何処へも、あの女のそばにも行けなくなつて、背中で死んでおしまいになるかも判らないわ、でも、お背中中で亡くなつてくだすったほうが、あたいには気がらくで、とても嬉しいわ。」

「昨夜の運転手さんには、あたしも、まいっちゃった。そんな娘か孫のような若い女と一緒になら、料金の倍くらいはお払いになったっていいじゃないかと、ゆすられちゃった。それをおじさまったら、それもそうだ、君から見れば倍額の請求は当然だと言つて、お払いになったじゃないの。」

「あの時は僕の心はおちついていて、何を言われようがそれがちつとも、腹に応えないで、相手の心をそのままにして置きたかったのだ。僕には不思議にそんな気のする時があるんだよ。」

「でも、さすがに温和しくお払いになった後で、運転手が言つたつて、どうも、つい独り身なものですから、ご無理を申し上げましてと言つて謝っていたわね、きつとお払いにならないと思つて厭がらせのつもりだったのね。」

「あの時にきみはひと言もいわなかったのは、よかったね。」

「ここにこして面白い事はじまつたという顔つきでいたのは、よい家庭に育つたお嬢さんみたいだったな。」

「あたしもそんな気がしていたわ、どうせ、おじさまはお払いになるんでしょうし、年もたいへん違うことも実際ですからだまつていたの、そしてね、あたし、あれほど人間なみに見られたことも、生れて初めてだったのよ、あたしも、えらくなつたと思うたくらいだわ。だってあたし達の仲間はみんな酷い飼われ方をされているんですもの。」

「どうして金魚はみんながつがお腹が空いているの。どの金魚もまたたきもしないで、空と餌ばかりさがし廻っているじゃないか。」

「一日餌をやつていて二日わすれている人達に、あたし達は飼われているんですもの、何時だつてお腹が空いてひよろひよろしているわけだわ、だから、眼ばかりつン出てしまっているの、世界じゅうで一等酷い目にあっているのは、人間じゃなくてあたし達の仲間だわ、岩と岩の間に通路をこさえてあつて、そこを泳ぐのが人間には面白い見物らしく、無理にがじがじした岩の中を歩かせるんだもの、尾も鱗も剥がれてしまう。」

「きのうも死んだ金魚が道ばたに、何尾も干からびて捨てられてあつた。」

「おとといも、あたしも、眼の動かない金魚を一尾見たわ。生きている間も碌々食わさしないで、死んだら道路におつぽり出すなんて酷い仕打だわね、お腹に砂金があると亜米利加の或る学者が、まんまとかついで見たけれど、あれはアマゾンのまむしみたいなお魚だったのね。」

「きみは大学では、何をやっていたんだ。」

「知れているじゃないの、編物と、それから美容術と、魚介の歴史と、それくらいなものよ、おじさまもいい質問をしてくださるわね、きみは大学で何をやったなんて他人が聞いたら、本物だと思ふじゃないの。」

「そのつもりで用心ぶかく言っているんだ、僕はね、何時でも男だから女の事を考えてばかりいるが、女の方では、男の事なんか些つとも考えていないと思つていたんだ、実際はそうじゃなかったんだね。」

「それはこういう事なのよ、女も男と同じくらいに、五対五の比率でいち日男の事ばかり考えているのよ、男の方からい

うと、男ばかりが女の事をたくさん考えていると思うでしょう、実際は半分半分なのよ、朝ね、お顔を洗ってお化粧をしているでしょう、あの時だって男のことを一杯に考えているのよ、散歩とか食事とかを一人するときにも、やっぱり男以外のことなんか考えていないわ、尾籠びろうなはなしですけど、ご不浄の中にいる時だって、やはりそれを考えつつづけているのよ。」

「どうして廁かわの中で考える事がきちんと何時も拗はかどるんだろ
うね、廁で考えた事は、何時も正確で後悔はない。」

「それから一つ、お夕方に勝手に勝手でお茶碗やお皿を洗っている時があるでしょう、せとものがちかちか触れて鳴るでしょう、そしてその水をつかう音とせとものの音とが、突然、静まって音がしなくなり、しんとして来る時が不意にあるでしょう。」

「あるね、」

「あの時にね、どうして手を休めなければならぬか、ご存じなの。」

「知らない。」

「つまり女が男について或る考えに、突然、取り憑よかれてしまつて手が動かなくなるのよ、ほんの少時といつても瞬間的なものだけれど、どうにも、身うごきの出来ないくらいに考え事が、心も身もしばりつけて来る瞬間があるのよ、あんな怖い鋭い時間ないわ、予感なぞがないくせに突然やつてくるのよ、前後の考えに關係なく、不幸とか幸福のどちら側においても、そいつがやって来たら動けなくなるわ、内容は種々あるけど、はっきりと分けて見ることは出来ないけど、それが

やって来たら見事にしばらくその物が往つてしまふまで、睨にらんでいても、見過ごすよりほかはないのよ。」

「男にもその茫然自失の時がある、廁の中なんかでそいつに、取っ憑かれると放してくれない奴がいる。」

「名状すべからざるものだわね。」

「まさにそうだな、名状すべからざるものだ。つまり名状とまでゆかない生々なまなましたものだ。きみはそんな時どうする。」

「あたい、じつとしてゐるわ、その考え事がすうと通りすぎるまで待つより外ないわ、来ることも迅いが、去つてしまうのも、とても素早い奴なのよ。」

「それ何だか判るか。」

「きょうという日が、あたいならあたいの中に生きている証拠なんでしょう。」

「そう言うより外に、言いようがないね、」

「それは嬉しいような場合がすくないわね、嬉しい事というものはそのなふうには、来ないものね、嬉しくないこと、つまり悩むということはからだの全部にとり憑いてくるわね。」

「そろそろきみの飯どきだ、時計が鳴ったぞ。」

「ヘンデルの四拍子ね、ウエストミンスター寺院のかねの音いろつて、あまくてあたいには、恰度ねむり薬みたいに宜く効くわ。」

「外まで鳴ると、聴えるか。」

「え、お池のうえに寝しずまると、じゃんじんと聴えてまいります。おやすみと言うようにも、また、合唱をしているようにも聴えて来ます。」

「きみは晩には水にかえつてゆくが、かえつて往くことを何

時だってわすれたことがないね。」

「そしたら死ぬもの。」

「きみを何とか小説にかいて見たいんだが、^{あげく}拳句の果にはオトギバナシになって了いそうだ、これはきみという材料がいけなかったのだね、書いても何にもならないことを書いて来たのが、まちがいの元なのだ、おじさんの年になっても未だこんな大きい間ちがいを起すんだからね、うかうかと小説というものも書けないわけだ、何の某がどうしたああしたとか、不二子さんとか令子さんがああしたこうしたとも、もう極りが悪くて書けないし、いよいよ、おじさんの小説もこんどこそお終いになったかな。金魚と揉み合つてのたれ死か」

「はたき尽してあるだけ書いておしまいになったから、あたいを口説いたんじゃないこと、誰もほかの女に持つてゆくには、あまりにお年がとりすぎているから、けんそんなあたいを口説いて見たわけなのよ、そしたら金魚のくせに神通自在で、ひよっとしたら人間よりかなお知る事は知っていると来たのでしよう。で、書くことの狙いが外れちゃった訳でしよう。」

「はかないね、小説家の末路というものははかない、いま恰度、其処を何も知らずに、僕は帽子をかむつて、てくてくほつ付き廻っているようなもんだ。」

「はかないという口くせで、きょうまでやっていらつしたんじゃないの、だから、後は仕方がないからそのはかないことばかり書くのよ、はかない人間がはかない事を書くのは当り前のことだよ、金魚の事は金魚のことしかかけないし、人間は人間のことしか書けないのよ。」

「よし判った、ではゆっくりお休み。」

「おやすみなさいまし、明日また。」

「今夜はおじさんと寝ないんだね。」

「きょうはくたびれちゃつて、おじさまを喜ばせるだけの体力が、あたいに、なくなっているのよ。」

「小さいからね、では、勢よく、どぶんとお池に飛びこめ、」

「どぶんと飛びこむわ、一、二、三、と、あ、わすれた、明日は理髪店に行く日なのよ、お忘れにならないで、……」

「有難う、ちんぴら。」

「よいしょ、どぶん、……と、お池の神さま待ち兼ねや。」

「日がみじかくなつたわね、四時半というのに、もう暗いわ。」

「だんだん寒くなつたらどうしましょう、お縁側に入れていただかなくちゃ、池が氷つたら、あたい、死んじまう。」

「硝子の鉢に入れて日向に置いてあげよう。」

「硝子の鉢はね、四方から見られるから羞かしいわ、あたい、何時でも裸なんだし、みんな見られてしまうもの。」

「じゃ別の鉢に入れよう。」

「え、そうして頂戴。あら、誰かが呼鈴を押したわ、お客さまよ、いま頃、誰方でしょう、もうお夕食の時間なのに。呼鈴もたった一つきりしか鳴らない遠慮深いところからみると、女の方らしいわ。」

「困るな、もう飯だし、……」

「出て見るわ。いらつしやいまし、誰方様でしょうか。」

「ちよつと、お宅の前を通りあわせたものでございますからつい。」

「あの、ご用向きは何でしょうか、ただ今からお夕食をとる
ことになってるんですが。」

「用事なぞはございませんけど、ただ、ちょっとお会いでき
たらと思ひまして、あの、変なことをおたずねするようでご
ざいますが、あなたさまは、奥さまでいらつしやいますか。」

「いいえ。」

「お嬢さまでしょうか。」

「いいえ。」

「ではお手伝いの方なんでしょうか。」

「いいえ。」

「秘書のようなお仕事をなすつていらつしやるんですか。」

「そうね、あたいにも宜くわからないんですけれど、秘書み
たいな役なんでしょうね、おじさまの事は何でもしてお上げ
していて、それで、おじさまが喜びになれば嬉しいんです
もの。」

「おじさまなどと、平常おつしやつてらつしやるんですか。」

「ええ、おじさま、おじさまと申しあげていますわ、併しあ
なたさまは誰方なんでしょう。ちつとも先刻からご自分のこ
とは、仰有らないじやありませんか。」

「わたくしはあなたを見たので名前も何もいう気がしなくな
りました。お可愛いあなたがいらつしては、お会いしても
くださるまいし、おあいしても、帰れと仰有るかも判りませ
ん。」

「変なことを仰有るわね、それでは、おじさまのむかしの方
でいらつしやるんですか。」

「もうだいぶ前に亡くなっている女なんですから、お訪ねし

てもむだだとは思ひましたけれど、女のはかなさで、ついお
立寄りしたのでございます。」

「と、仰有いますと、あなたはゆうれいの方なのね、」

「ええ、ゆうれいなのでございます。」

「おじさまはどうしてゆうれいのお友達が、こんなに沢山お
りなんでしょうか、も一人のゆうれいは講演会にまでいら
つしたんですが、まるで本物そっくりに作られていました。
あなただつてこう見たところは、間違いない本物の女の方
に見えるんですもの。このごろゆうれいごっこが流行るのかし
ら。」

「あなただつて、それ、そんなに、巧くお上手に化けていら
つしやる。」

「まあ失礼ね、でも、驚いちゃった、今まであたいの化けの
皮をはいだ人は一人しかいなかったのに、あんたは一見、す
ぐ剥いでおしまいになったわね、どういふところでお判り
になります、……」

「言葉づかいの甘つたれ工合でも判るし、第一、人間はそん
なに絶え間なくブルブルと顫えていはしません、ちつとも、
おちついていらつしやらない。」

「これから氣をつけるわ、あたいね、毎日、もう寒くてぶる
ぶるしてるんですもの、でも、あんたの化け方は巧いわね、
それに煙草でも喫んでお見せになったら、にせ物だとは誰も
氣附かないわ。」

「先刻ね、何でもおじさまの事はしてお上げすると、仰有つ
たわね。」

「ええ、言つたわ。だから、外の方には一さい何もして貰い

たかないんです。あんただってお通しすれば、何をなさるか判りはしない。」

「じゃ、お通ししてくださらないのね。」

「ええ、まあね、かんにんして戴くより外はないわ、お送りかたわら、そこらまで歩きましょうか。」

「どうしてお取次してくださるのが、おいやなんですか。」

「いやだわ、もう、寒くなるとあたいは、からだの自由が利かなくなるんですもの、あたいがいなくなったら、毎日でもいらっしやい、その前にゆうれいだということをわざわざにそう言って置きます。京都の病院で手術して死んだ方だと申し上げて置くわ。」

「あの時にも、手紙一本下さらなかった。」

「だってあんたは外の方と朝鮮まで、かけ落ちまでなすったのでしょう。おじさまを打っちゃらかしておいてね、そして四十年振りに手紙をくれと仰有るのは、無理だわよ、書くにも、書きようもなかったらしいんですもの。」

「あの時は手術後で、わたくしは弱って死にかけていました、そんな時妙なもので不意にあの方の手紙が読みたくなったのです。生きた人間の書いた字というものが人間の死際にも、きゆうに見たくなって来る時がございますもの。むかし沢山いただいた手紙に、まだ洩れてゐる何枚かがあるような気がして、それを書いていただきましたの、そしてまだわたくしという者がその中にほんのちよっぴりでも、のこっていたらそれを読んで死にたかったんです、わたくしは毎日の注射でいのちをつないで、お手紙ばかり待っていました、二日生き三日生き、そしてお手紙を待っていたんですもの。」

「それがとうとう最期まで来なかったのね、あんなに女にあまりおじさまがそんな薄情なことが、平気でしていられるのかしら、想像も出来ないわ。」

「それはわたくしの仕打があまり悪かったからでしょう、恰度、わたくしが結婚する二日前におあいしたときにも、黙ってかくしていました。そして二日後には、もう逃げるようにして結婚して了ったんです。」

「騙し打ちだわね、そりゃあんまり酷いわ。」

「口に出してはいえないことだし、とうとうそんなふうになって了ったのです、お会いして今言おうか、ちよつと後で言おうかと迷いながら、ずるずるに言うことが出来なかったんです。」

「おじさまの怒りが四十何年の後にも、まだ、いま怒ったばかりのようになまなましいのは、あたによくわかるわよ、それはあなたのやり方が余りに悪いのよ、それでいて今頃お会いしたいなんて宜い気なものね、いくら死んでいたって、取次いであげないわよ。」

「けれどわたくし、未だあの方が怒っていらっしやるという気持ちに、縋^{すが}って見たい気がしているんです。そこにまだあの方がわたくしに残していらっしやるものが、消えない証拠があるんじゃないんでしょうか。」

「誰が騙し打ちをした人に気があるのですか、縋られて堪ったものじゃないわ。」

「お慍りになったわね、わたくし、正直に申し上げただけれど。」

「慍るも慍らないも、ないわよ、何のために今どきうろうろ

出ていらっしやるの、あたいのいる間、いくらいらっしったって、何時だって会わせて上げるもんですか。」

「だからその訳をいつてゆっくり一度はあやまって見たいと、そればかり考えて、うかがって見たんです。」

「いまから幾ら謝りになっても、受けた^{きず}痕あとがそんなに簡単に治るもんですか、あやまるなんて言葉はどうに、通用しなくなっているわよ。」

「怖い方ね、見かけによらない方。」

「おじさまは莫迦でいて女好きだから、あ、よしよしと仰有るかも知れないが、あたいの眼をくぐろうとしたって、一歩もお庭の中にも入れはしない。」

「では、帰ることにします。やはり来るんじゃない。訪ねても何にもならない事は、気のせいかな、判っていたんだけれど、」

「つい来たくなったというのでしよう、本物のお化けなら門からふうわりと飛んで往って、おじさまのお書斎に行ったらいいでしょうに、そんな勇敢なまねも出来ないくせに、」

「そうよ、そんな勇氣なんか微塵もないのよ、ただ、しょげて帰るだけですわ。」

「早くかえってよ、門の前では人が立ち停って見るし、この上、困らされてはとても迷惑千万だわ。」

「では、また、ご機嫌の好い時にうかがうわ。」

「二度といらっしやらないでよ、何てぬけぬけした化け者でしょう。あんな女と若い時につきあったおじさまだって、おつちよこちよい極まるわ。一遍、男を振って置いて、自分で逢いたい時には化けて出るなんて、都合の好い化け者もこの

世の中にはいるもんだナ、あばよ、一昨日^{おととい}お出でだ。」

「どうしたの、永々と話をしていて、此方にちっとも、お客さまの案内もしないじゃないか。」

「やっと帰って行ったわ、お目にかかりたいといったから、いま、お食事がはじまるんだからって、お断りしたわ、それでいいでしょう。」

「どんな顔をしているか見たかったね、四十五年も会わない人なんだ。」

「役者みたい白い顔をしていらっしった。むかしのまんまのお顔らしいわ。手術の後では、よほど、お逢いたいふうな話だったけれど、おじさまをたすけなかった人は、こんどは、此方で見事に手厳しく振ってやったわ。」

「あの頃のおじさんはね、とても、正気の娘さんではつきあってくれない男だったんだよ、つきあう方がどうかしている、拙い顔をしているし、生意気だし、なりふりだって破落戸^{ゴロツキ}みたいだし、お金はないしね、そんな奴に相手になる女なんて一人もいはいなかったんだよ。」

「だって女の人に眼がなかったとも、言えはいえるわよ、幾ら穢^{きたな}い恰好していたって若さが物言うじゃないの。若い男ってどんな不恰好な顔をしていらしても、皮膚はぴいんと張っていて、それだけでも、一生のうちで一等美しい時なんだもの。」

「ところがキミ、僕ときたら、若い時分からジジイみたいな半老^{はんら}ケの面^{おもて}をしていたんだ、いくら剃っても髭はぎしぎし生えるし、毎日お湯にはいっても顔はきれいにならない、僕はね、

その時分流行っていたカイゼル型の髭を生やしていたが、この髭ときたら、その頃の写真を見ただけでも、ぞっとしてくるね、何しろ生やし際はまだ薄いもんだから、ひそかに墨を刷っていたこともあるんだ。」

「あら、可笑しい、お髭を生やしていच्छたら、どんなお顔になるか、想像も出来ないわ、大体に於て人相好くないわね。」

「暴力団か、ゆすりの類だね。」

「でも墨をいれていたのは、ちょっと、哀しいじゃないの。」

「あさましい限りさ、それにお金は一文もないと来たら、どんな娘さんだつて寄り付きはしない。」

「おじさまも、そんな時があつたのかナ、すべからく、人は勉強して成人すべきだね。」

「生意氣いうな、だから、きょうの人、ちょっとくらい通してもよかつたね、あれでも、おじさんの家にも来てくれたし、僕も訪ねて行つたが、何時でも帰りぎわには、手、手と玄関のくらがりで、お母さんに見られないように握手をしてくれたまんだよ。」

「握手がそんなに重大な意味があつたの。」

「握手がいまのキスみたいに、効果があつた時勢だつたんだ。」

「そお、それなら、少時^{しばうく}でも、お通しすれば宜かつたわね、あたい、おじさまを振った女だと思つと、無性にかつとしちやつて、おじさまに会わせてやるものかという、気が苛^{いら}立つて来ていたんですもの。」

「きみはすぐかつとするね。」

「燃える金魚というけれど、ほんととは温和しくみえても、す

ぐ、ほねの中までかつと燃えて来るんだもの、でも、あたいにね、あなたは奥さまでいらच्छいますか、それともお嬢様なんですかとお聞きになつたわ、あたい、つい赧^{はにか}くなつちやつたけれど、ここだと思つて落着いて、秘書だと言つてやつた。」

「うまく化けたね、さあ、飯を食おう。」

「あたいね、何時も塩気のないものは厭なのよ、もっとおいしい物がたべたいの。たとえば、髪の毛みたいな、みじん子みみずね、あれをそろそろと食べてみたいのよ、たまにおじさま、溝に行つてすくつて来てちようだいよ。」

「きたない話をしなさんな。溝にしゃがんでこの年になつてさ、みじん子がすくえるものか、考えてもごらん。」

「そいでなきや羽根のある小さい虫が食べたいわ、蚊^{ぶん}みたいな蚊^{ぶん}み^みたいな、ぴかぴかした羽根がおいしいのよ、舌のうえにへばりつくのがとても可愛くておいしい。」

「それ、何のまねをしているんだ。」

「これ、あたいのヒミツの遊びなのよ、こつやつて藻を一杯あつめてまん円くして、その中からだごとすぽつとはいりこむのよ、眼の中がすっかり青くなつちやつて、硝子の中にいるみたいに、とても宜い気分なのよ、この中でヒミツをひらく。」

「どういふヒミツなんだ。」

「あたいだつてもともと女でしょう、子を生むまねもして見たいじゃないの。」

「あ、そうか。」

「はやく子どもが生みたいんだけど、もう、こんなに寒く

なっちゃったから、生めそうもないわ、だから子を生むまねをして、遊ぶだけは藻の中でも遊んでみたいわ。」

「うれしそうだね。」

「卵をうんと産んでそれを毎日解らなくなるまで数えて見て、そしてその卵にからだを擦り寄せている気持ち持たらないわ。」

「金魚の子は可愛いね、きみのように大きくなると、憎たらしいところが出てくるけれど。」

「でも、あたいくらいにならないと、おじさまのお对手にならないじゃないの。あんまり小さいいと眼の穴の中にも落っこちそうなんだもの、人間ってとても大きいからナ、口のそばなんか危くて近寄れないもの、人間って何故そんなにばかばかしく、大きい体からだをしているんでしょうか。」

「これでも未だ僕は小さい方だよ、中には西洋人なぞ、二米メートルもある奴がいるよ。」

「あたいなぞ人間の親指くらいしか、ないわね。」

「きみから見たら図体が大きいんで、いくら驚いても驚き足りないだろうね。」

「おじさま、そろそろ今年の最後の虫を捕りに行きましようよ、こおろぎなら、まだ、そこらに沢山鳴いているわ。」

「明日の晩行こう、昼間にきみが籠を買って置いてくれれば、何時でも出掛けられる。」

「去年のこおろぎの眼ん玉なんか、すすすきになっていたわね、まるで石炭がらみたいになっけていても、まだ、生きているんだもの、」

「人間はそうはゆかない、」

「あたいだっていまに尾も鰭ひづりも、擦り切れちゃって、おしま

いには、眼ん眼も見えなくなるでしょうね、それでも、生きていられるかしら。」

「さあね、」

「あたい、何時死んだって構わないけど、あたいが死んだら、おじさまは別の美しい金魚をまたお買いになります？　とうから気になっけていて、それをお聞きしようと思っけていたんだけれど。」

「もう飼わないね、金魚は一生、君だけにしておこう。」

「嬉しい、それ聞いてたすかった、あたい、それではればれて来たわ。何処にも、あたいのような良い金魚はいないわよ、お判りになる、おじさま。」

四、いくつもある橋

「この頃、小母おははさまは些ちつとも、お歩きにならなくなったわね。」

「立って歩くのが大儀らしい。膝ひざばかりで歩いている。」

「あたいね、昨夜ゆうべ考えてみたんだけれど、膝ひざぶくろを作つて膝にあてたら、どうかと思うの、でないと永い間には、膝の皮が擦り剥むけて了うわよ。」

「膝ひざぶくろを着きけてもいいんだけど、よく、ほら、街なかに足なえの乞食こじきがいるだろう、あの人達がね、膝の頭に袋を嵌はめているのを思い出して厭いとなんだ。ぼろ布の厚あつぽったい奴をくっ附つけているのを見ると悲しくなる。」

「あたいも、そいを考えて見て、たまんなかった。歩けなくなつてから何年におなりになるの。」

「そうね、十九年になるかな。」

「十九年めに小母さまのお部屋がやっと、出来たわけなのね。」

「橋の上には何時でも乞食がくそのように坐っていて、足も腰も立たないんだ。僕は毎日家で見えるような光景が、橋の上にあるような気がして通りすぎるんだが、それも、田舎にある橋なぞではなくて、東京のまん中で見る橋なんだ、たとえば昔の数寄屋橋という橋はたまらなかった。」

「あそこに、お乞食^{こしき}さんがいたの。」

「お天気さえ好ければ、きつといた、或る日は男、或る日は女というふうに、どれも足のきかない人達がいたんだ、そしてこのごろは橋はないが、通るたびに眼に橋が見えて来て僕が彼処に坐り、また、僕の妻も、僕と交替に彼処に出ているような気がして、あの橋があそこを通るたびに見えて来る、そして新橋の方に夕雲がぎらついて、街は暮れかけていても、橋の上だけが明るく浮いて見えている。」

「おじさまったら、そんなふうになんか小説ばかり頭ん中で書いていらっしやるのね。だって小母様が橋の上にお坐りになるなんてこと、ありえないことじゃないの。」

「人間は誰だって彼処にいちどは、坐って見る頭の向きがある。そうでなかったら、仕合せというものを認めることが出来ない訳だ。僕もあそこに何時だって坐って見るかくごはある。戦争中はみんな彼処に坐っていたようなもんだ。」

「じゃ、あたいは下水に流されてゆくのかね。」

「きみは下水のお歯黒溝であぶあぶしているし、僕は橋の上で一銭呉れというふうに、一日嘸鳴っているようなもんだ。」

「おじさまは仕合せすぎると、ぜいたくしたくなって、お乞

食さんのまねまでしたくなるのね。いやなくせね。」

「それを真向からいえるということも、ふてぶてしくて好いじゃないか。」

「橋というものは渡れば渡るほど、先には、もっと長いのがあるような気がするわね。けど、橋はみじかい程悲しくて、二三歩あるくと、すぐ橋でなくなる橋ほど、たまらないものないわね、あたいの池の橋だって水の中から見上げていると、天までとどいていようだけど、先がもうないわよ。」

「燐寸箱^{マッチ}二つつないだような橋。」

「その橋の下を威張ってとおるたびに、橋は白っぽく長たらく、僅かに日光をさえぎったところでは、この頃とても寒くなって来たわ、水はちぢんで、ちりめん皺^{しわ}が寄って暗いもの、あたい、どうしようかと毎日よくよしているんだけど、おじさまだって判ってくれないもの。」

「縁側にきみを入れる、用意がちゃんとしてある。」

「それでもしてくださらなかったら、このままだと水は硬いし重くなるばかりよ。」

「おじさんのお膝においで。」

「ええ、あら、もう大工さんが登りはじめたわね。あたいね、大工さんて、板や四角い木で字を書いている人だとおもうわ。床^{とこ}という字を書いているうちに床の間が出来上るし、柱という字を書くために柱はとうに建ってしまうし、大工さんだって字書きとおなじだわね。」

「紙のようにかんたんに木を折り畳んで、つかっている人なんだ。」

「きようはお二階のほうのお仕事ね。釘袋を下げ、そこに金

槌を入れ、そして鋸^{のこぎり}を腰にはさんでいて用意がいいわね。何処でも足がさわれば屋根の上までも、登って行けるのね、おじさまは登れないでしょう。」

「登るにも、眼が廻って登れない。」

「いい気味ね。あたいはきのう釘箱にあった一等こまかい釘を、一本盗んでやった。見ているとぴかぴか光っていて、無性にほしくなって来るんですもの。」

「何にするの、釘なぞ盗んで。」

「何にもしないけど、ただ、ほしだけなの、ただほしとだけ思う事あるでしょう。あれなのよ。」

「釘というものは妙にほしくなるもんだね。」

「あたね、あんなに沢山の材木がどこでどう使われるか判らないけど、もう、何処かに毎日つかわれていて、幾らも残っていないのに驚いちゃった。家を建てるということは細かい材木が一杯要るのね。そして何処にどの材木がいるかというのをちゃんと、一々細かい嵌め方も大工さんは知っているのね。一本盗んでやろうと見当をつけて置いた細い木も、何時の間にか、つかっていたわ、盗まなくて宜かった。」

「すぐ判つて了うよ、どんな小さい木でも、みんな頭に覚えてるからね。」

「おじさま、あれ、目高が池から飛び出しちゃった、危い、危い、ちんぴらのくせに勢い余って飛び出すやつがあるものか、ほらね、酷かったでしょう、眼を白黒させているわ。」

「水をいれ過ぎたかな。」

「お池の岸まで、お水をぴったり入れてあるからなのよ、それでは、ちょっとはねて見たくなるのね、おじさまが悪いん

だ。」

「この頃目高の数がだいぶ、減って来たようだ、ひよっとすると。」

「そんなにあたいの顔を、見ないでよ、そんなに食^たべてばかりはしないわよ、疑りぶかく見つめていらっしやる。」

「百尾もいたのに、もう、ばらばらとしかないじゃないか、総計、五十尾もない。」

「あたね、食べはしないもの。とても、にが味がして、頭なぞ目高のくせにかんかん坊主で硬いのよ、食べられはしない、ふふ、でもね、内緒だけど弱っているの、いただくことあるわ。」

「にがいのが美味しいんだろう。」

「うん、かんぞうがにがくてね、とても、わすられない美味しさだわ。」

「そこで一尾ずつ呑みこんだ訳だね、生餌だと、うんこの色も臭いもちがって来るんだ。」

「だんだん薬喰いをして置かなければ、寒さでからだが持たなくなるのよ、あれ食べたあと、からだ中が燃え、眼なんかすぐきらきらして来て、何でもはつきり見えて来るんだもの、おじさま、慍^いらないでね、時どき、いただかしてよ。」

「可哀そうになあ。」

「だっておじさまは、でかい、牛まで食べておしまいになるでしょう、牛はもうもう鳴きながら毎日屠殺場に、なんにも知らないで曳かれて行くんだもの、目高なんかと桁^{けた}違いだわ、もうもうは、殺されても、まだ、殺されたことを知らないでいるかも判らない、きっと、もうもうは、何時でも、昔の昔

から何かの間違いで殺されているとしか考えていやしない。」

「もうもうも可哀そうだが、目高も可哀そうだ。」

「では、暢^{んき}気に、ぶらりぶらりと歩いてゐる豚はどう。」

「あれもね、何とも言えない、みじめなもんだ。」

「これからは、もうもうも食べないし、ぶうぶうも食べないようにしましょうね、せめて、おじさまだけでも、その氣になつていらつしたら、牛も豚も、よく聞いて見ないと判らないけど、うかぶ瀬があるような氣がするわ。」

「うむ。」

「とうとう今年はあたい、子供を生もうと願いながら、産む間がなかった。ね、何とかしておじさまの子を生んでみたいわね、あたいなら生んだっていいでしょう、ただ、どうしたら生めるか、教えていただかなくちゃ、茫^{ぼん}やりしてゐては生めないわ。」

「はは、きみは大変なことを考え出したね。そんな小さいからだをしていて、僕の子が生めるものかどうか、考えて見てご覧。」

「それがね、あたいは金魚だからよその金魚の子は生めるんだけれど、おじさまの子として育てればいいのよ、おじさまはね、毎日大きくなったあたいのお腹を、撫でたりこすったりしてくださるのよ、そのうち、あたい一生懸命おじさまの子だということを、心で決めてしまうのよ、おじさまの顔によく似ますように、毎日おいのりするわよ。」

「そして僕のような凸凹面の金魚の子に化けて生れたら、きみはどうする。」

「おじさまの子なら、似てゐるに決つてゐる、人間の顔をし

た珍無類の金魚でございと、触れこんだら慾張りの金魚屋のお爺ちゃんがね、息せき切つて買ひに来るかもわからないわ。」

「そしたらきみは売る氣か。」

「売るもんですか、だいじに、だいじにして育てるわ、みじん子食べさせて育てるわ。」

「みみずのみじん子食うのは、いやだ。」

「じゃ塩鱈^{しおたか}はどう。」

「塩鱈のほうがいいね。」

「金魚の子つてのは、そりやあずきくらいの小ささで、そりや、可愛いわよ、まるでこれがおさかなとは思えない小ささで、尾もひれも頭もあつて泳ぐの。でね、名前をつけなくちゃ。」

「そうか、金太郎とでも、つけますか。」

「もっと立派な名前でなくちゃ厭、金彦とか何とかいう堂々たる名前のことよ。」

「寛^{ゆづ}くり考えて置こう。」

「では、あたい、急いで交尾してまいります、いい子をはらむよう一日じゅう祈つてゐて頂戴。」

「あ、」

「朱いのがいいんでしょう。金魚は朱いのに限るわよ。黒いのは陰氣くさいから、例によつて燃えてゐる^{たくま}遅^{おそ}しいやつを一尾、つかまえるわ。」

「しくじるな。」

「しくじるもんですか、炎のようなやつと、夕焼の中で燃えて取りくんで来るわよ。」

「おじさま、見てよ、木だの板だの、一つもなくなっちゃった。」

「うむ。」

「どんな小さい板切れも、みんな、つかったのね、覚えをしてあったものをみんな覚えのあるところに、嵌めこんで了っているわ。大工さんは大工さんという生きた機械なのね。」

「こまかいことでは、藤蔓ふじづるというものがみんな右巻きだということまで、知っているんだ。」

「じゃ豆だの、そいから草の蔓だのは、みんな右巻きになっているの。」

「左巻きはないらしいんだ。木の事では博士みたいな人達だ。」

「おじさま、お二階にあがって見ましょう。」

「上ろう。」

「あたい、今までに、お二階に暇さえあれば上っていたのよ、階段を一段ずつ上るのが面白いのと、それにお二階の畳の上にぺたっと坐っていると、誰も知らない遠い所に来たような気がしていて、ヒミツを感じていたわ、おじさまだつてあたいがお二階にいたことは、些ちとも、知らなかったでしょう。」

「知らなかった。」

「お庭の景色がずっと見渡せるし、その景色が大きくふくらがって、拡がって見えて来るのよ、けど、小母様はお二階にはあがれないわね。」

「上っても下りることが出来ないんだ。」

「あたいね、お二階にいと、飛び下りたり、つたつてひさ廊りやうからぶらんこして下りて見たくなる。」

「僕も柱づたいに、つるつると不意に下りて見たい気がする。」

「それに二階というものは、かなしいところなのね、階下したとは世界がちがうし、階下したのことが見えないじゃないの。」

「それは階下したの人はどんなにあせつても、二階のことが見えないと同じもどかしきなんだ、階下したと階上うへとで人間が坐り合っている、この二人は離ればなれになっているんだ。」

「気が遠くなるような、難かしいお話なのね。」

「その内に二階の人がいなくなれば、それきりで会わずじまになる、次にまた別の人が来て二階に住んでも、例によって会わなければ何処の誰だかも、判らないことになるんだ。」

「二階の人は空ばかり見ているが、階下したの人はお部屋にいても、空は見る事が出来ないとおっしゃるんでしょう。」

「そうだよ、階下したと階上うへでは大きなちがいだ。」

「何だかお話が判らなくなつて来たじゃないの、お二階の人はどうして階下したの人と、お話しないのでしょうか。」

「二階にいるからなんだ。」

「階下したの人は階下したにいるからなんでしょうか。」

「そうだよ、幾ら言つても同じことなんだ、問題は階上うへと階下したのことなんだよ。きみなら、ちよろちよろと泳いで階下したまで行くが、人間はそうは簡単にゆかない。」

「よししましょう、こんな、めんど臭い彼処此処廻っているようなお話は、幾ら言つてもおなじことなんだもの。」

「同じことじゃないよ、大きなちがいだ。」

「まだ言っていらいっしやる。それより、もっと吃驚するようなお話してあげましょうか、ゆうべね、おじさまのお書斎からかえつて、また、このお二階にあがろうと、階段からあがつて行つて襖ふすまをあけますとね、外の明りがさしている中に誰

か人がいるじゃないの、坐つてて、何にもしないで、ぽかんと膝のうえに手を乗せているの、あたい、襖をほそ目にあげてみると、ふっと、その人がゆっくりと此方に顔をお向けになった。」

「きみは何時でも、そんな話ばかり見附けているんだね、僕よか余程へんなところを沢山に持っている。その人は一たい誰だというの、そんな人なんかちつとも僕にはめずらしくない、僕にはいろんな女でも、人でも、何時でもふらふら出会うしているんだ。」

「では、話するのやめるわ、今夜も来るかも知れないから、そつと此処に来ていて見ようか知ら。」

「さあ、日が暮れたから、下りよう。」

「え、階段ですれちがいに上つて来る人がいるかも知れないわ。しかしおじさまには見えはしないわよ、人間の正気にはね。」

「ばかをいうなよ。」

「氣をつけてね、すべるわよ。」

「うん、誰も上つて来ないじゃないか。」

「おじさまに、それが判るもんですか。ほら、いま、おじさまは噎くさめをなすつた、ぞつとお寒氣がしたのでしょう、ほら、ほら、なんだか、すうとしちゃつた。」

「何を見ているんだ。」

「お二階に誰かが上つたような氣がするもんですから、おじさま、障子はしめていらしたわね。」

「うん、だが、わすれたかも知れない。」

「おじさま。」

「何だ、お腹なんか撫でて。」

「あのね、どうやら、赤ん坊が出来たらしいわよ、お腹の中は卵で一杯だわ、これみな、おじさまの子どもなのね。」

「そんな覚えはないよ、きみが余よ処そから仕入れて来たんじゃないか。」

「それはそうだけれど、お約束では、おじさまの子ということになっている筈なのよ、名前もつけてくだすつたじゃないの。」

「そうだ、僕の子かも知れない。」

「そこで毎日毎晩なでていただいて、愛情をこまやかにそそいでいただくと、そっくり、おじさまの赤ん坊に変わってゆくわよ。」

「どんな金魚と交尾したんだ。」

「眼のでかい、ぶちの帽子をかむっている子、その金魚は言つたわよ、きゆうに、どうしてこの寒いのに赤ん坊がほしいんだと。だから、あたい、言つてやつたわ、或る人間がほしがっているから生むんだと、その人間はあたいを可愛がっているけど、金魚とはなんにも出来ないから、よその金魚の子でもいいからということになったのよ、だから、あんたは父親のケンリなんかないわ、と置いて置いてやつた。」

「そいつ、慍いつたろう。」

「慍いつて飛びついて来たから、ぶん殴つてやつた、けど、強くてこんなに尾っぽ食われちゃつた。」

「痛むか、裂けたね。」

「だからおじさまの唾で、今夜継いでいたきたいわ、すじがあるから、そこにうまく唾を塗つてぺとぺとにして、継げ

ば、わけなく継げるのよ。」

「セメダインではだめか。」

「あら、可笑しい、セメダインで継いだら、あたいのからだごと、尾も鰭も、みんなくっついてしまわないの、セメダインは毒なのよ、おじさまの唾にかぎるわ。いまからだって継げるわ、お夜なべにね。お眼鏡持って来ましようか。」

「老眼鏡でないと、こまかい尾っぽのすじは判らない。」

「はい、お眼鏡。」

「これは甚だ困難なしごとだ、べとついていて、まるでつまむ事は出来ないじゃないか。もっと、ひろげるんだ。」

「羞かしいわ、そこ、ひろげろなんて仰有ると、こまるわ。」

「なにが羞かしいんだ、そんな大きい年をしてさ。」

「だって、……」

「なにがだってなんだ、そんなに、すばめていては、指先につまめないじゃないか。」

「おじさま。」

「何だ赦い顔をして。」

「そこに何かあるか、ご存じないのね。」

「何って何さ？」

「そこはね、あのね、そこはあたいだちのね。」

「きみたちの。」

「あのほら、あのところなのよ、何て判らない方なんだろう。」

「あ、そうか、判った、それは失礼、しかし何も羞かしいことがないじゃないか、みんなが持っているものなんだし、僕にはちつとも、かんかくがないんだ。」

「へえ、ふしぎね、人間には金魚のあれを見ても、ちつとも、

かんかくが生じないの、いやね、まるで聾みたいだわね、あたいだちがあんなに大切に守っている物が、判らないなんて、へえ、まるで嘘みたいね、おじさまは嘘をついていらつしやるんでしょう。シンゾウをどきどきさせている癖に、わざと平気をよそおうているのね。」

「うむ、そういうのも尤もだが、きみだちの間だけで羞かしいことになっていても、僕らには何でもない物なんだよ。」

「人間同士なら、羞かしいの。」

「そりゃ人間同士なら大変なことなんだよ、お医者でなかったら、そんなところは見られはしない。」

「分らないな、人間同士の間で羞かしがっている物が、金魚の物を見ても、何でもないなんてこと、あたいには全然わかんないナ。」

「金魚は小ちゃいだろう、だから、羞かしいところだか何だか、判りっこないんだ。」

「お馬はどうなの。」

「大きすぎて可笑しいくらいさ。」

「じゃ人間同士でなかったら、一さい、羞かしいところも、羞かしいという感覚がないと仰有るのね。」

「人間以外の動物は人間にとっては、ちつとも、感じが触れて来ないんだ、まして金魚なんかまるでそんな物があるかないかも、誰も昔から考えて見たこともないんだ。」

「失礼ね、人間ってあんまり図体が大きすぎるわよ、どうにもならないくらい大きすぎるわ、金魚のように小さくならないか知ら。」

「ならないね。」

「でも、おじさまとキスはしているじゃないの。」

「きみが無理にキスするんだ、キスだか何だか判ったものじゃない。」

「じゃ、永い間、あたいを騙^{だま}していたのね、おじさまは。」

「騙してなんかいるものか、まア型ばかりのキスだったんだね。じゃ、そろそろ、尾っぽの継ぎ張りをやろう。もっと、尾っぽをひろげるんだ。」

「何よ、そんな大声で、ひろげろなんて仰有ると誰かに聴かれてしまうじゃないの。」

「じゃ、そつとひろげるんだよ。」

「これでいい、」

「もっとさ、そんなところ見ないから、ひろげて。」

「羞かしいな、これが人間にわかんないなんて、人間にもほかが沢山いるもんだナ、これでいい、……」

「うん、じつとしているんだ。」

「覗いたりなんかしちゃ、いやよ。あたい、眼をつぶっているわよ。」

「眼をつぶっておいで。」

「おじさまは人間の、見たことがあるの。」

「知らないよそんなこと。」

「じゃ外の金魚の、見たことある。」

「ない。」

「お馬は。」

「ない。」

「くじらというものがいるでしょう、あのくじらの、見たことおありになる。」

「くじらのあれなんてばかばかしい。」

「人間がほかの動物に情愛を感じないなんて、いくら考えても、本当と思えないくらい変だナ。」

「きみはたとえば鮒^{ふな}とか目高とかをどう思う、目高は小さすぎるし、鮒は色が黒くていやだろう。」

「いやよ、あんな黒ん坊。」

「それじゃ僕らと同じじゃないか。」

「そうかな、目高はちんちくりんで間に合わないし。」

「金魚は金魚同士でなくちゃ、何^{なん}にも出来はしないよ。」

「そういえばそうね。」

「うまく尾が継げたらしいよ。」

「眼を開けていい。」

「いいよ、尾を張って見たまえ。」

「ありがとう、ぴんと張って来て泳げるようになったわ。おじさまは相当お上手なのね、どうやら、彼処此処のぶちの金魚を騙して歩いているんじゃない？ 尾のあつかい方も手馴れていらっしゃるし、ふふ、そいからあの、……」

「あ、捉^{つか}まえた、田村のおばさま、きょうは放しませんよ、きょうで三日もいらっしっているんじゃない？ あたい、ちゃんと時間まで知っているんだもの。きのうも五時だったわ。」

「ええ、五時だったわね、五時という時間にはふたすじの道があるのよ、一つは昼間のあかりの残っている道のすじ、も一つは、お夕方のはじまる道のすじ。それがずっと向うの方まで続いているのね。」

「そのあいだを見きわめていらっしやるんでしょう、きつと、」

誰にも見られないように、でも、あたいには、それが見えてくるんですもの。」

「あなたの眼にはとても適^{あて}わないわ。石の塀の上にいらっしやるのが、遠くからは、朱い球になっていて見えている。」

「潜り戸からおはいりになってよ、おじさまもいらっしやいます。退屈してぼうっとしていているわよ、何時でもお夕食前になんだか、ぼうっとして気味のわるいくらい黙りこくっているわよ、ゆり子おばさまの来ることを知っているのか知らと思うことがあるわ。知っていて黙っているのか知ら？」

「些^ちとも、ご存じがないのよ、お夕方っていうのは、誰でもだまっていたい時間なのよ。」

「きのうもおばさまの話をしたけれど、ふんと言ったきり後にはなんにも、言わずじまいよ。だから、あたい、お腹が空いているんだと勘^{かん}ちがいしたんですけれど、余りおあがりにならなかったわ。」

「ほほ、お腹が空いたなんて面白いこと仰有るわね。」

「まあ、おばさま、変にお笑いになっちゃ厭。どうしてそんな声でお笑いになるの。」

「べつにわたくし変な声でなんか、とくべつに、笑わないんですけれど、……」

「だって寒気がしてくるわよ。さあ、おはいりになって。」

「きょうはいけないの、お使いのかえりなものですから、すぐ戻らなきゃならないのよ。」

「誰のお使いなのよ、誤魔化^{ごまか}したってだめ。」

「まだお買物があるんですから、それから片づけなくちゃ。」

「じゃ、あたいも一しょにお供するわ。離れないでついてゆ

くわよ。」

「いらっしやい、あなたのお好きな物、何でも買ってあげるわ。」

「おばさま、じゃ金魚屋に寄って頂戴、うちの金魚にたべさせる餌を買っていただきたいの。」

「冬なのに、金魚屋のお店なんかあるかしら。」

「いえ、金魚の問屋のお爺ちゃんの家^{うち}にゆけば、何時だってあるのよ。」

「問屋は何処にあるの。」

「あたい、ちゃんとそれを知っている、マアケットの裏長屋の二軒目で、おばあちゃんが古綿の打直しをしているんだから、綿打直シの看板を見てゆけばすぐ判るわ、おじいちゃんはその間に冬越しの金魚と一しょに暮しているの。えびを挽^ひいて糠^{ぬか}をまぜた餌を一日作っているわ。」

「行ったことあるんですか。」

「ええ。」

「まあ、羞かしそうに顔をかくそうと、なさるわね。」

「いやよ、そんなに顔ばかり見ちゃ。あたい、あんまり度たび餌^えを買いにゆくもんだから、お爺ちゃんと仲よしになっちゃったんです。」

「そお、あそこの床の低いお家でしょう、古綿打直シ、ふとん縫いますって、看板出ているところでしょう。」

「ええ、おばさま黙っててね、あたい、お爺ちゃんとお話しますから。」

「はい、はい。」

「お爺ちゃん、今日は、きょうは冬越しの餌^えを買いにきたの

よ、もうすっかりお挽きになったの。」

「おう、三年子、どうしたい、きょうはべらぼうに美しい女と一緒にだ、おめえも、えらく大きくなって別嬪^{べっぴん}になったもんだ、もうおめえも来年は四年子だ、四年子は化けるといふぜ。」

「もつと低声でお話するものよ、あの方に聴えるじゃないの、きょうはうんと餌を仕込みに来たのよ、お金はあのおばさまがみんな払ってくたさる。」

「おめえは何時でも金持と一緒にいいなあ、うんと、買ってくれ、冬場は目高一尾だつて売れはしないんだ。」

「じゃ十箱ほどこいたくわ。」

「おいおい、三年子、十箱で幾らになると思うんだ、千二百円もするんだぜ。」

「いいわよケケケチしないでよ、田村のおばさまがみな払ってくたさるわ、それに、金魚藻をどつきり包んでね、ほかに、今年のたべおさめに、みみずのみじん子を缶詰の空かんに一杯入れて頂戴、久しくいただかないから、どんなに美味しいでしょう。」

「おめえはみじん子が好きだったな、これはお魚^{まけ}にしとくよ、けどなあ、三年子、おめえのような仕合せな金魚は、この年になるまで未だ一度も見ることがない、永い間この商売をしているけれど、病気もしないで何時もおめかしして歩いてるのは、まあおめえくらいなもんだ。」

「美しからざれば人、魚を愛せずだわよ。」

「ときにおめえ、これじゃねえか。」

「ええ、お腹が大きいのよ、卵がぎっちり詰っている。お腹

がぴかぴかして光っているでしょう。」

「どうだい、おれの家で産んではくれまいか、おめえの子なら、きっと、仕合せのいい子が生れるに決っている。」

「だめ、だめ、先約済みなのよ。」

「どうしてさ。」

「子供をほしがっている人間がいるのよ、だから、冬ぞらだけど、生むことにしたのよ。」

「人間がかい。」

「うん、あたいを大事にしてくれる人がいるの。」

「余程の金魚好きな奴なんだな、じゃ、冬の間はからだに気をつけてな、来年の春また思い出したら来てくれ。」

「おじいちゃんもお年だから、杖でもついて気をつけてね、あまり焼酎をおあがりになると、お腹が焼けてくるわよ。」

「うん、判った。」

「さよなら、あたいの育ての、二人とない大事なおじいちゃんよ。」

「卵から育てた生きのよい、お化けの三年子よ。」

「あの金魚屋のおじいちゃんは、とても、好いお人でしょう。」

「好い方ね、あなたの何に当る人なの。」

「そうね、しんせきみたいな人か知ら。」

「だってしんせきって変ね、ただの金魚屋さんなんでしょう、何の関係のない方なんでしょう。」

「ええ、それはそうなのよ、けど、こんなお話よしましょう、それよりお歸りにちょっと寄って、おじさまにお会いになって頂戴、でなかったら、折角いらっしったのに詰んないじゃないの。」

「けど、これから、お買物をしなきゃならないの。」

「じゃ、お買物を先になすつたらどう。」

「ええ、そうね。」

「何をお買いになるんですか。」

「お野菜なんだけれど。」

「そこのお店にはいりましょう。百合根の球があるし、ほうれん草はいらないんですか。」

「もやしがいいわ、それから細葱を少しに黄色い蜜柑。」

「あら、厭だ、もやしをお買いになるの、白っぽくて蛆々^{うじうじ}していて厭ね。それに細葱^{ほそねぎ}って、糸みたいで気味がわるいわ。おばさまは変なものばかりお買いになるのね。」

「あなたは何がいるの。」

「あたいはと、そうね、そうめんにしようか知ら。」

「そうめんて長くて、変に曇^{くも}っていきらいだわ。」

「冬、たべる物のない時に、たべますのよ。」

「上山さんもおあがりになるんですか。」

「おじさまは長細いものは何でも大嫌い、そうめんでも蛇でも、きらいだわ。」

「蛇でも、」

「ええ、冬は蛇がいなくなるから、いいわね。あゝ、も来ちゃった。ちょっと俟^{まち}ってて、おじさまがいるかどうか見るから。」

「危いじゃないの、塀に登ったりなんかして？　まるで男みたいな方ね。」

「いるいる、また、何時もみたいになかんとしている、きつとお腹が空いているのよ、空いている時には、いつも、きつ

とあんな顔をしている。」

「じゃ、わたくしこれで失礼するわ。」

「何おっしゃるのよ、お這入りになる約束じゃないの、きょうは帰しはしないから、幾らでもだだをこねるがいいわ。」

「これから帰ってお食事のしたくもしなければならぬし、お洗濯の取り入れもわすれていたのよ。」

「お食事のしたくって、誰のしたくをなさるのよ、おばさまは、お一人で暮しているんでしょう。」

「ええ、わたくしの食事のことなのよ。」

「だったら、おじさまと久振りでご一緒にお食事なさるがいいわ。」

「その他にも用事があります。」

「何もご用事なんか、あるもんですか。」

「お洗濯物の取り入れがあるのよ。」

「洗濯物なんかお帰りになってからでもいいわ、さあ、這入りましょう。」

「ほんとにきょうはだめなのよ、急ぐ用事が一杯たまっているんですもの。」

「おばさまのばか。」

「何ですて。」

「ばかだわ、お会いしたくて前をぶらぶらしているくせに、いざとなると、びくびくして避けているじゃないの。そんなに厭^{いや}だったら、初めっから来ない方がいいのよ。」

「まあ、酷い。」

「何時だって現われると、すぐ逃げ出してしまいうくせに、何のために現われるのよ、そんなのもう古いわよ。」

「だってご門の前に、ひとりで出て来てしまふんだもの。」

「嘘おっしやい、自分で五時という時間まで計って来ながら、お洗濯物の取り入れも、何もないもんだ、一緒にきょうはお家にはいるんですよ、でなきや、手に噛みついてやるわよ。」

「怖いわね、何とおっしやっても、わたくし帰るわよ。」

「帰すもんですか。」

「手、痛いわ、何てちからがあるんでしよう。」

「噛みついたら、もっと痛いわよ。」

「じゃね、わたくし顔をなおします、だから、あなたの口べにと、クリイムを貸して下さらない、お池のそばでちょっと化粧を直すわ。」

「その間にずらかるお心算つもりなんでしょう。」

「ずらかるなんて口が悪いわ、そんな人の悪い事はしません、柿の木の下でじっと俟っているわよ、白粉も持って来て頂戴。」

「ええ、だけど心配だ、おばさま、お金のはいつているハンド・バッグをお預りするわ、ずらからない証拠にね。」

「はい、ハンド・バッグ。」

「じゃ、すぐ急いで取って来るわ、ほんと何処にも行かないでね、おじさまにそう言っとくから、きょうはじめてお食事するといったわね、あたい、嬉しいわ、おじさまもきつと、ほくほくなさるわ。」

「これも、ついでに、お料理してね。」

「百合根、いただくわ、もやしは厭よ。じゃ、すぐ戻るわ。おばさま、もう、白椿が咲いているからお剪きりになっていいわよ、とてもいい匂いだから、俟っている間に敷かいでいらっしやい。」

「ありがとう。」

「くらいから街灯点けて置くわ。」

「おじさま只今。」

「何処に行っていたんだ、化粧道具なんか持っていない時分何処に行くんだ。」

「いい人が来ていて、おじさまにお会いするために顔をなおすと仰有っていらっしやるのよ、だから、お化粧道具を持つてゆくんです。」

「いい人って誰なんだ。」

「当てて見てよ、当るかナ、」

「じらさないで言つてごらん。」

「田村ゆり子。」

「いま時分に、どうして君はあの人に会ったのだ。」

「お家の前でおあいして、一緒に買物をしてこれから一緒におじさまと、お食事のお約束したのよ。」

「うむ。」

「いやにれいたんな顔附ね、ご一緒におあがりになるんですよ。」

「約束なら仕方がないが、いまごろどうしてうろついているんだらう。すぐ逃げ出すくせに。」

「きょうは大丈夫、ハンド・バッグ預っちゃった、何処にも往かないで俟っている証拠なのよ。」

「見せてみたまえ、」

「古い型だわね、二十年も、もっと以前の流行らしいのね、下げ紐ひもがついてないし、口金くしがみんな錆さびびついている。こん

な古風なバッグ提げるの極りわるくないかしら。」

「中を開けてごらん。」

「人様の物を開けるの悪いじゃないの、おじさまらしくないこと仰有るわね。」

「まアちょっと開けて見たまえ。」

「開かないわ、錆びついているのよ、ええ、ぎゅつと握^{にぎ}って見るわ、やっと開いたけど、手巾とバスの回数券と、それに香水の瓶がはいっているきりよ。」

「バスの回数券があるの、ふうむ。」

「何処かにお勤めになっ^ていらっ^しったのね。」

「さあ、どうかな。」

「どうして回数券なんか、要るんでしょうか。」

「よく見たまえ、この回数券は戦前もずっと前の、藍色^{あゐいろ}の表紙じゃないか、あと三枚きりしかない。こんな物いまだき通用するもんかね。」

「あきれた。」

「くわせものだよ、きみが勝手に作り上げたおハナシなんだ。およし、こんな事を企^くんでおじさんを困らせるのはお止し。」

「だつてあたゐ、実際、田村さんの手をうんと握^{にぎ}って見たものの、講演会の時よりか、ずっとふとつていたわ。」

「庭で俟^{まち}っているの。」

「そんな約束なのよ、きょうは間違^{まちが}いはないのよ、あたゐ、騙^{だま}されるのいやだから、先刻^{さきどき}ね、手を痛い程握^{にぎ}ったときに髪の毛を二三本噛^かみ切^きってやったわ、ほらね、これ、本物の髪^{かみ}なんでしょう。」

「髪^{かみ}だね。」

「でも、人間の髪にまちがいないでしょう、つやといい、ウェーブのかかっている工合^{こうが}といい、……」

「ウェーブがかかっているな、併^ひし古いあとだね、」

「おじさま出て見ましようよ、お迎えしておあげしたらお喜びになるわ、ご門^{かど}のきわにいらっ^しやるんです。」

「いや、僕はここにいるよ。」

「ちょっとくらい出たつていいじゃないの、意地悪^{いぢあく}いわないで、さあ、どっこいしょと、立つのよ、どっこいしょと、……」

「僕は寒気がしているから出ないよ、きみ、往^いつて連れて来てくれたまえ。」

「出^でたくないんですか。」

「うん、出^でたくない。」

「こんなにお頼^{たの}みしてみても、だめなの。」

「気が重^{おも}いんだ。」

「冷酷無情な方ね。」

「冷酷でも何でもいいよ。」

「おじさまのバカ、バカヤロ。」

「ばか、だと。」

「バカだわよ、わずかに庭にも出てやらないなんて、そんな酷^こい仕打ちがあるもんか、二日も三日も遠くから通^とっている人にさ、ちょっとくらい、出てあげてもいいじゃないの。」

「何^{なん}とでも言^いいたまえ、きみが呶^う鳴^めつたつて屁^へでもない。」

「じゃ本物の人間でないと言^いいたいでしょ、だから、会う必要はないというのね。」

「よくそこに気がついたね、あれは本物の女ではないんだ、

きみが金魚屋に行く途中で田村ゆり子のことを、考えながら歩いて、遂々、本物に作り上げてしまったのだ。」

「じゃ、何時か街の袋小路の行停まりで見たときも、あたいのせいだと、仰有るの。」

「あの時は僕ときみとが半分ずつ作り合わせて見ていたのだ、だから、すぐ行方不明になって了った。人間は頭の中で作り出した女と連れ立っている場合さえある。死んだ女と寝たという人間さえいるんだ。」

「それはユメなのよ。」

「ユメの中で男と逢った女で、孕んだ例は沢山にあるんだ。」

「おじさまのバカも無限なバカになりかかっているわね、後生だから庭にだけでも出て見て頂戴。」

「しつこい出目金だ。」

「出目金とはなんです。あたいが出目金ならおじさまは何だい、死に損ったふらふらお爺ちゃんじゃないの、あたい、往つてあんな死に損いなんかに会わないで、帰っていただくようにいうわよ。」

「ついでに、もう来ないでくれと言ってくれ。」

「会いたいくせにそれを耐えて、いらいらしていてそれが本心だというの、会いたくても飛び出せもしないくせして、意気地なしね、うそつきなのね、両方で同じことを言っているんだ、おばさまはおばさまで逃げ廻っているし、此方は此方で逃げを打つなんて、揃って人間なんて嘘のつき合いをしているようなもんだ。人間なんて生れてから死ぬまで、嘘の吐き合いをしているようなもんだ。」

「死んでいても、まだ嘘をついているかも知れないさ。嘘ほ

ど面白いものはない。」

「じゃ、勝手に嘘をついていらっしやい。あたい、おじさまってもっと女のところが判る方だと思っていたら、ちっとも、判っていない方なのね、こまかい事なんかまるで判っていない、……」

「女のところが判るものか、判らないから小説を書いたり映画を作ったりしているんだ、だが、ぎりぎりまで行ってもやはり判っていない、判ることはおきまりの文句でそれを積みかさねているだけなんだ。」

「もうそんなお話、聴きたくないわ、何時でも同じ事ばかり仰有っている、よく飽かないで言えるわね。」

「言ったことを何時も繰り返して言つては、人間は生きているんだ。」

「あら、誰かがあたいを呼んでいるんじゃないか知ら、黙っていて、ほらね、聴えるでしょう、おばさまが呼んでいるのよ、おじさまにはあのお声が聴えないの。」

「誰の声もしてはいないじゃないか、金魚の空耳という奴だよ。」

「いいえ、すぐ門のわきにいらっしやるんだけれど、それにしては遠い声だね、ほら、また、きれいな声で呼んでいる。」

「きみはすっかり何かに捲き込まれているね、少し変になっている。」

「おばさま、いま行くわよ、すぐ、行くわよ、おばさま。」

「そんな大声を出すと、家の人みんな吃驚するじゃないか。」

「ほら、お答えになったわ、はやく、いらっしやいてね、あの声が聴えないなんておじさまこそ、そろそろお耳が遠く

なっている証拠だわ。」

「きみに聴えていて僕に聴えない場合だってある。とにかく、そんな女なんかはもう門の前にも庭の中にも、俟ってはいはいないよ。」

「薄情なおじさまと違うわよ、ちゃんと俟っていらつしやるから、お約束だもん。」

「早く往って見たまえ。」

「早く往こうが遅く往こうが、あたいの勝手だわ、おじさまなんか、いやな奴には、もう、構っていらない。」

「いよいよ、ふくれて来たね。」

「明日から何もご用事聞いてあげないから、かくごしていらつしやい。威張ったって碌な小説一つ書けないくせに、ふんだ。」

「あら、おばさまがいらない、おばさま、何処なのよ、まあ、そんな処に跼^か踏^がんでいらつしたら、わかんないじゃないの。」

「あなたお一人？」

「おじさまは出て来ないのよ、おばさまがきつとお帰りになつていると、思っているのよ。」

「わたくしもいま、帰ろうとしているところなんです、いろいろ有難う、じゃ、もう帰らしていただくわ。」

「だってそんな、……おじさまはお会いたいくせに、わざと、冷然としていらつしやるのよ、あたい、喧嘩しちゃった、明日からは一さい合財^{がっさい}ご用事してやらないってね。」

「困るわ、わたくしのためにそんなこと言ったりして。」

「何だか本当はお会いするのが怖いらしいのよ、煙草を持つ

ている指先の顫えを見せまいとして、手を動かして誤魔化していたわよ。」

「どうしてでしょう。」

「ときにおばさま、右の手をちよつと見せて。」

「何なの。」

「まあ、まだ腕時計をねじ取ったあとがのこっているわね、この傷痕どうして永い間治らないのでしょうか、これ、おじさまの仕業じゃないわね。」

「ちがうわよ、他の別の人。」

「一たい誰なの、お時計盗んだやつ。」

「それはいえませんが、知っている人なんです。」

「きつと、以前おばさまにお時計を買ってくれた人でしょう、その人が訪ねて来た時に、おばさまはとうに死んでいた。そしてその男が出来心だか何だかわかんないけど、力一杯に手頸から時計をもぎ取って逃げ出したのね、おばさまの死んだことなんぞ、どうでも宜^{よろ}かったのね、ただ、時計がきゅうにほしくなったのね。」

「あなたは探偵みたいな方、その男がわたくしの死顔も見ないで、その足で別の女の所に行つて兼ねて約束しておいた時計だと言って、それをやったのよ、女は嬉しがり男はいい事をしたと思ったのでしょう。」

「その男っておばさまの、好人だったの。」

「まあね、引き摺られながらも、いやでも、そうならなければならぬ場合が、わたくしにもあったんですもの。」

「おじさまは、その方の事を知っていらした？」

「ごぞんじなかったわ。」

「おばさまはその人の事を隠して、言わなかったのでしょうか、おじさまに厭な思いをさせたくなかったのね。」

「いえ、わたくしの事は何もお話したことがないし、お尋ねもなさらなかった……ただ、何時も見られているような気がしていたけれど、また何時もなにも無関心のご様子でもあったわ。」

「その時計を盗んだ方、憎らしいとお思いになる？」

「それほどでもないけど、男という者はみんなそうなのよ。」

「じゃ今頃、何処かの女の手頸にお時計がはめられているのね、いやね、死人の手頸からもぎ取った時計をはめているなんて、その女の人、おばさまご存じ？」

「一緒にはたらいていた事があったから、知っているわ、性質のいい人なのよ、だから騙されやすく、騙されるのが嬉しかったのでしょう、そういう女だって沢山いるのよ、世間には。」

「騙されていながらそれが嬉しいことになるのか知ら、あたいはそれがよく判らない。」

「騙されるということは、気のつかない間は男に媚びているみたいなものよ、気がつく、がたっと何処かに突き墮された気がしてしまうんです。」

「おばさまも突き墮されたのね。」

「ええ、では、もう暗くなったから、そろそろ行きましょう、もうこれで再度とお目にかかることもないでしょうから、あなたも寒い冬じゅう気をつけてね。」

「も一度おじさまを呼んで見るわ、あたいの呼ぶのを俟っているかも知れない。」

「呼ばないで頂戴、ね、呼ばないで。」

「ちょっと俟っててよ、ちょっと、些んのちょっと俟って。」

「では、また。」

「おじさま、おばさまが帰るから、すぐ、いらっしってよ、おじさま。」

「そんな大きな声をなさると、近所のお家に聴えるじゃないの、お呼びになるとわたくし足が竦んで来て、きゆうに、歩けなくなるんですもの。」

「何しているんでしょう、まだ、何かにこだわってじっとしているのよ、出て見たくてならないくせに、何時もああなんだ、何をしているんだらう、ね、時計見ていてね、あと五分間俟って、五分経ったらいらしてもいいわ、拜むから。」

「ええ、では五分、でも、出ていらっしやらないでしょう、こんなわたくしにお会いになるわけがないもの。」

「いま出ていらっしやるわ、きつと。あ、五分経っちゃった。」

「じゃ、わたくし、……」

「いいわ、お帰りになってもいいわ。その道まっすぐだとバスの停留場が見えます。あ、それからおばさまのお持ちの回数券は戦争前の藍色券なのよ、あんな物、おつかいになれないからお気をつけてね。」

「ぞんじています。」

「そお、じゃ、どうしてハンド・バッグに入っていたんです。」
「どうしてはいっていたのか、わたくしにも、よく判らないわ。でも、それはそっとして置きたかったのよ。」

「そちらは反対の道路だわよ、其処にはもう人家がない、さびれた裏通りだもの。」

「ええ、」

「あら、其処は焼跡になっていて、街灯も点いてないのよ、道順教えておあげしますから俟っていて、水溜りばかりでとても歩けはしないわ。」

「ええ。」

「俟っていて頂戴、意地悪ね、きゆうにそんな早足になっちゃって、ほら、見なさい、危いわよ、水溜りにはまっちゃったじゃないか、ちよっと立ち停ってよ、一と走りお家に行つて、懐中電灯持つて来ますから。」

「……………」

「俟ってと言っているじゃないの。聴えないのか知ら、振り向きもしないで行っちゃった。」

「……………」

「おばさま、田村のおばさま。暖かくなったら、また、きつと、いらっしやい。春になっても、あたいは死なないでいるから、五時になったら現われていらっしやい、きつと、いらっしやい。」

後記 炎の金魚

「蜜のあわれ」の終りに、燃えながら一きれの彩雲に似たものが、燃え切って光芒だけになり、水平線の彼方にゆっくりと沈下して往くのを私は折々ながめた。こういう嘘自体が沢山の言葉を私に生みつけ、ついに崩れて消えるはれがましさを、払い退けられずにいたのである。七歳の少女が七歳であるための余儀ない遊びならともかく、私はすでに老廃、その廃園にある青みどろの水の中に、まだ盛りあがる囁言に耳をかたむけていたのである。

私は去年の夏のはじめ、一尾のさかなを買って町を歩いていた。こんな実際の事が私にありうることでない奇蹟の日を記憶させた位だ。暇のない人間にある不意の暇というものの程、複雑に細かくはたらく時間はない、この日から私はいろいろな言葉を拾いはじめ、実にばかばかしい多くの囁言にうつつを抜かしていたのである。その間じゅう私はそわそわとして機嫌が良かった。聡明な作家というものはこんな駄じゃれや回顧を、何時も蹴飛ばして立派やかな材料と、つねに四つに取り組むのが本来の仕事なのである。危気のある仕事には作家は親しまないものだ。だが、不倖にも私の中にあるインチキは、遂にいかなる巧みな完成を為し遂げようとしても、それはただの魚介を仮象としてごてつくばかりの世界に、ふらふら不用意にも迷い込んでいたのである。

私は嘗て詩を書いて売り飛ばしていた男であり、いまも古

い詩をたのまれると臆面もなく書いている詩人くずれの男であつた。だが感心なことには数百篇をこえる小説物語の中に、嘗て詩をはさみ込んだ例は二度くらいしかない、小説の構成のうえで詩を書き入れることは、物語にたるみを生じるし、詩の印刷の頭が低いから其処にある隙間が、或る場合には小説の行列をこわしてうおそれがあるからだ。だから私はずっとそれを避けていた。数行の詩の挿入ですらそうであるのに、この物語に詩を匂わそうという意図は全然なかつた。寧ろ詩の感応や漂泊があやまって現われそうであつた時には、私はそれを現実に引き戻して極端に回避していたのである。

では、この物語は一体何を書くとしたのか、という問題はこれを書き終えてからも、私にあやふやな多くのまよいを与えた。読んだら判るじゃないかと、そう言つて了えばそれまでだが、私自身にも何が何だか判らないのである。ただ、このような物語の持つ美しさというものは、どの人間の心にも何時もただようている種類のものではあつて、それは特定の現身ではないのだけれど、どの人間にもふかく嵌り込んでいる妙な物なのである。或る一少女を作りあげた上に、この狡い作者はいろいろな人間をとらえて来て面接させたという幼稚な小細工なのだ、これ以上に正直な答えは私には出来ない。

先にも述べたように、一尾のさかなが水平線に落下しながらも燃え、燃えながら死を遂げることを詳しく書いて見たかつた。つまり主要の生きものの死を書きたかつたのだが、そんな些事を描いても私だけがよい気になるだけで、誰も面白くも可笑しくもなかつたと思つて止めた。小説家という者は

つねに好い気な人間であつて、時に屢々これは面白いと勘違いをして冗らない事を長々と書く誤ちを何時も繰り返して、それにとつ掴まると、まんまとやり損うのである。

たとえば今日は気分が大変に悪い、どうにも、めまいがして遊泳の平均した姿勢を失つてしていると彼女は言い、私はすでに紅鱗に褪色のある彼女を見て、どこが悪いというより、これはもはや此のさかなの死期が来ていると思つた。泳ぐとしながらきりきり舞いをし、少し泳いではばったりと泳ぎ停まり、腹を横にしてそのままにいるすがたを見たが、また、再び背鰭を立てようとして焦つても、その事はもう為し得なかつたのである。嘗てあなたは若しわたしが死んだら、その日から水ばかり眺めていらつしやるでしょうと彼女は言つたが、それは、そのような日が近づいていることが感じられ、よく見ると水には生氣のない重いよたよたした波が、彼女の周囲に鉛色の空を映して取りまいていた。もつとよく注意してみると、もはやお喋りも、顔をつくろうという動いたものが見られなかつたのだ、そこで勿論私は話しかけるとか、声で呼ぶとかをしなかつた。あなたは死際の誰にでも冷淡でいらつしやる、それが老いた人間の習性だということを、私は彼女から聴いた覚えを思い返した。或る未亡人に私は或る日ふと言つたことがあつた。あなたは毎月のように友人のお通夜に行つたり告別式に詣つたりしているが、他人の死にはちつとも心を動かさなくおなりでしょうというと、そうです、わたくしは人が死んだその悲しみなぞと対合合つていて、夫の死ですっかり悲しみははたいて了つていて、何もいまは残っていませんという返事であつた。私はそれも、もつとも

の事に思つた。夫の死に行き会つた人は、人間の死の最悪の時期を経験しているから、いかなる悲しみもそれ以上に参ることはあるまいからだ。

或る若い婦人記者でその記者の仕事はまだどれだけでも経験していない人が、帰り際に靴を履くために腰をかがめ、そして靴を履いてしまった小さな支度を終つた眼で、ひとあたり庭先の水のあるところを眺めて言つた。

「おさかなはどこにも、いないようですが。」

婦人記者は私の長い二百枚もある、その物語を読んでいたのである。

「あれは、とうに死にました。」

「そお、それはお可哀そうなことをしました。」

われわれはじかに生き物に親しんでいる間、われわれと心が其処に常住していることを疑わないために、屢々、その生き物に高度の愛情が^{わたかま}蟠つていることに今さらに驚くことがあつた。私達のこの驚きはその生き物を喪つた時にはじめて^{うなず}頷ける状態であつて、平常は何でもない普通の事に思われていた。つまり、われわれはたとえ対手がどういふ種類の生き物であつても、その生態としたしく一緒にこれを眺めて暮していたといふことから、他の生き物と比較にならない近親感があつて、他人から見て実にばかばかしい可愛がり方を見せているものだ、或る一人の婦人を愛するといふ状態の男を、外から見る時には想像の出来ないこまやかさがあつて、これにはただ、そうかなあ、こういう事もあるのだといふ結論を出してその聖地から引き揚げる外はないのである。

「ひでえ風邪じゃねえか、それでよく春まで持ちこたえたも

のだ。」

小売商人の金魚屋の診察は、ただ、簡単にさういっただけであつた。こんなの死んだら、また代りにどんな良いのでもいるから、お飼いになるなら電話を下されば直ぐ持つて参りますと彼はいい、さかなも、こんなに裏返しになつて浮いて来たら、いくらわたくしでも手の付けようもございません、こいつは三年子でよく生きた方です、素人さんがお飼いになつたとしても、これ以上は持ちこたえることが容易ではないのです。病気の直接の原因はいわば睡眠不足というやつで、夜にお廊下にお入れになつた事はいいとしても、障子越しの蛍光灯が夜おそくまで水の中に差しこんで、さかなは何時もうつらうつらとしか眠れなかつたのが、死因といへば死因なんでしょうね、それに胃腸の方にもしこりがあつて固くなつています、こうなつたらご覧のとおり肌の色が先刻とは、ずっと朱の色を失つて来ていますから、とても助かりようもございませんと言つて、彼は素気なくさつさと歸つて了つた。そして間もなく金魚は一塊の朱になり、それも次第に黄ろい濁りを鱗の間に融かして浮び上つて来た。

大抵、私は書きはじめると書き損じはしない方であつたが、それは原稿という紙を引き裂く鋭い音が何時も嫌いで、山を裂くように怖れたからだ。それが今日は殊更に頭に來て生き物の死に影響するような気がし、書き損じの原稿紙を四つに畳み、さらにそれを又四つに折つて雑誌の間に片づけて了つた。そして山を裂くような音響を封じたことが嬉しかった。

永い作家生活の中でも、ひよんな事から、妙にその作品が成功したとも成功しないとも限らないのに、頭にのこつて自

分だけがそれを大切にあつかう作品が二三篇はあるものだ、それを書いていた日とか、うごかない動機とかが一綴りの原稿のまわりにまで溢れていて、それを書くことや整えることも出来ないもやもやがあるものだ、人間がつくる霧みたいなものなのだ、凡そ人間の事で書けない筈がないのに、そのもやもやは書き分けられないのである。書くのに破廉恥な事とか、きまりが悪く、あまつたるい事とか、文章には表現出来ない顔や性質とか、そういう種類の物が作家のまわりに霧や靄となり、もやもやになって何時も立ち罩めてゐる。それらは或る小説の或る機会にうまく融け合ってくれるもやもやなのである。このもやもやを沢山持ち其処から首を浮べて四顧している者が、作家という者だと言えそうである。

このもやもやは「蜜のあわれ」にまだ豊富にあることで、もう私は沢山という気がした。そして当然ここでペンを擱くべき日の来たことを知り、それにすら名残りが留められたのである。作家の慾はふかく実力はあさい、あさい才能の中で何時もどたばたする自覚を失っていることでは、余計な作為が分不相応に自分の中に暴れ廻っていることも、冷やかに眺めて通り過ぎる者も作者なのである。作家というものの五体のところどころには不死身の箇所があつて、幾ら年月が経つても死なない部分だけが、色を変えずにつやつやと生きている。それがどのように狭小な部体であっても、深度があり記憶は素晴らしい、へどもどして行き詰まるとそこを敲きさえすれば、扉はひとりで開き、中の物が見え聴える音は聴え、たすけを呼ばなくともたすけて呉れるのである。この痣のような瘡に似た不死身の一処をさすりながら、彼は生き彼は書き、

ありもしない才華へのあこがれに悶えている残酷さである。

この解説のようなものを書き終えた晩、何年か前に見た映画「赤い風船」を思い出して、それを書きこむことを忘れないように心覚えをしてその晩は寝たが、翌朝になってすっかり忘れてしまい、まる二日間思い出せなかった。今朝になって漸と「赤い風船」の面白さを思い当てた。この映画のすじはわすれたが、貧しい一人の少年が坂上の人家の窓先から一個の風船を見つけ、それを失敬して持って逃げるのが物語の発端で、少年の往くところ風船がついて廻り、風船のあるところ町を往く少年のすがたがあつた。最後に風船は悪少年共によつて野外で踏み潰されるが、併し別の風船が突然数十球のつながりになって、町じゅうの少年等の持つ風船を集めて、碧藍の空に舞い上つて往くという物語であつたが、総天然色の風船群が逆光の中にあざやかに空高く、高層の建物と次第にはなれてゆく美しい光景で、この映画は先の少年の嬉しさを取り戻して終りを告げていた。この「赤い風船」を見た後に、こういう美しい小事件が小説に書けないものか知ら、何とかしてこんな一篇の生ける幼い愛情が原稿の上に現わせないものかと、一カ月くらい映画「赤い風船」に取り附かれ、ばかはばかなり、慥巧ぶった考えを持つてゐたが、悪小説家の悪癖は日を趁うて「赤い風船」の聖地から離れて往った。そして日々の忙殺は「赤い風船」の喜びもまた私の頭からあと形もなく飛散して了つたのである。

だが、私はついに「赤い風船」を今日思い当てて、いつぞや、こういう物が書きたい願ひを持っていたが、お前が知ら

ずに書いた「蜜のあわれ」は偶然にお前の赤い風船ではなかったか、まるで意図するところ些いささかもないのに、お前はお前らしい赤い風船を廻して歩いていたではないか、お前だって作家の端くれなら、或る日或る時にひょんな事から感奮して見た映画の手ほどきが、別の形でこんな物語を書かせていたではないか、一旦書いて見たいという考えを作家が持つということは、作家と名のつく人間にはいつかは仕事の上に、何等の覚性もなく、ひとりでにこんがり、色つやをおびて現われて来る機会があるのではないか、そしてその事が仕事が終わった時にやっぱり風船はとうに頭の奥ふかくに取りついていたことが判るのだ。心が覚えをこめていたということは大したことなのだ。そして私は愛すべき映画「蜜のあわれ」の監督をいま終えたばかりなのである。漸く印刷の上の映画というものに永年惹きつけられていたが、いま、それを実際に指揮を完うし観客の拍手を遠くに耳に入れようとしているのである。

私は会話とか対話で物語を終始したことは、小説として今度が初めての試みであって、一さいの野心も計画も持たなかった。最初三四枚すらすらと書き上げ、それを心に反芻はんそうしているあいだに自然にこんな情景は、この形で踏むことが面白いという教えを自分自身の中から受け、また自然である気がして進んだのであるが、危気あぶなげは百枚くらいに達して感じたものの、勢いとなめらかさは遂に説話体になり、それがたとえ失敗に終わっても生涯に一度くらい失敗したってよいという度胸を決めて了ったのである。私自身が些すこしでも気持よく書き分けられ、美しいものが作り上げられたら、それでよいと

いう考えをもちや捨てることをしなかったのだ。昔は親を殺したり主人をあやめたりする人間の名前の上に、悪という流れた文字をのつけて、その悪を死歿の後の荊冠しかんとしていた。悪七兵衛君、悪源太君もみなそういう武人であった。しかし女では悪・君子とか、悪・八重子などという荊冠の名前は無い、悪小説家、悪作家という者がいたら、私など悪文のかわりは疾とうにつけられているし、私自身も悪作家といわれた方がはるかに他の美名を貰うより潔い、だからこそ、この物語の穢ち氣きを自ら好むのである。そしてこれが悪作ならいよいよ悪作家と名附けられるべきである。煮ても焼いてもくえない悪作家という者は、見渡したところ何処にもいそうもない、そこに一人前に坐りこむのも小気味好い話である。

今日この原稿を綴とじて終り、ふと毎月「新潮」の竹山道雄氏の手帖を読む例にならって、愛読の眼を凝らしてゆくと、「大宇宙の中で、われわれの生命は、(さながら大きな闇の中に弧をえがいて飛んでいく一つの火花のようなものだといったら、いちばん当たっている。)」という数行に出会であして、この原稿の最初に書いた私の二三行そっくりなのに、ひそかに驚いた。私は何時もこの遠くで消滅する光芒が絶えずキラめいていることを感じ、竹山道雄氏のそれもこの火花にカチ当てられたのである。偶然ではあるが、話のよく合う人と話をした数瞬を感じた。何十万年来の人間の爪跡を尋ねている竹山氏の文獻も、そしてたわいない私の文章の往くところも、一つの不死身の火を感じたことでは、同じ思いが邂逅かいこうしたわけである。